

越知町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

女 川 遺 跡

1997・3

高知県越知町教育委員会

女 川 遺 跡

1997・3

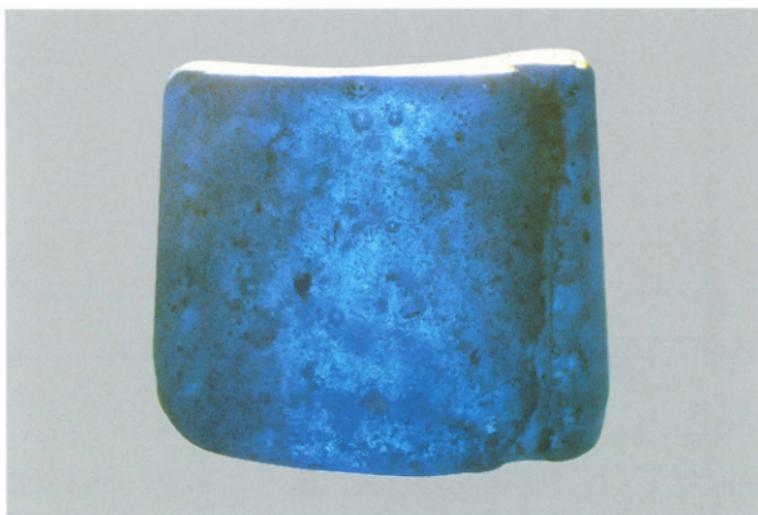
高知県越知町教育委員会



第1次調査 T P 10 出土半円筒状ガラス製品（外面・両端面）

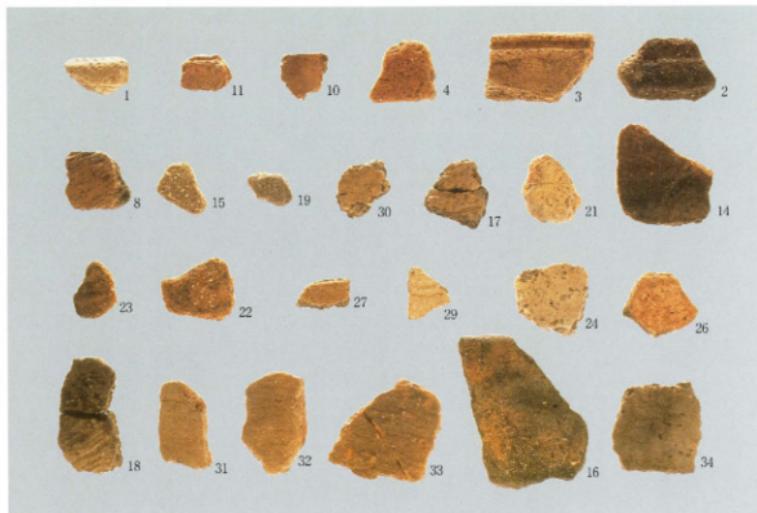


第1次調査 T P10 出土半円筒状ガラス製品（内面）



同上（外面、透過光）

卷頭図版 3



第1次調査出土遺物（縄文土器）



同上（石器）

序

越知町は、高知県の中部、高知市から西方32キロメートルの山間地にあり、南北に細長い長方形をしています。周囲は八町村に隣接しており、標高300から1,000メートルの石鎚山系の支脈に囲まれ、西方に横倉山県立自然公園を仰ぎ、その間を仁淀川が流れ緑と清らかな水に恵まれた自然豊かな町です。

越知町教育委員会では、町の開発事業等に伴い女川遺跡の発掘調査を3次に渡り実施いたしましたところ縄文時代から近世の遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。本年度の成果により、今後の調査に一層の期待が寄せられます。

最後に、調査にあたってご指導を頂きました奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長肥塚隆保氏、(財)高知県埋蔵文化財センター曾我貴行氏並びに調査に深いご理解、ご協力を頂きました地権者の皆様方、関係者の方々に厚くお札を申し上げます。

平成9年3月

越知町教育長 西 森 英 彦

例　　言

1. 本書は遺跡確認調査（第1次調査）、個人住宅建設（第2次調査）及び町道建設（第3次調査）に伴う、女川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 女川遺跡の所在地は、高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかである。
3. 調査期間ならびに発掘調査面積は次のとおりである。

	(調査期間)	(発掘調査面積)
第1次調査	平成7年12月5日～12月21日	4.6 m ²
第2次調査	平成8年2月16日～2月29日	1.75 m ²
第3次調査	平成8年3月4日～3月16日	2.07 m ²

4. 発掘調査及び整理作業は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導を得て、越知町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査員 曾我貴行（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査員）
調査事務 岡 義雄（越知町教育委員会・教育次長）
同 戸田千秋（越知町教育委員会・社会教育係長）
同 千頭山香（越知町教育委員会・主幹）
同 織山幸治（越知町教育委員会・主事補）

5. 本書の執筆・編集は曾我がおこなった。
6. 遺構等の名称については、それぞれT P（試掘坑）、S K（土坑）、S X（不明遺構）、P（ピット状遺構）、K（搅乱坑）、T R（トレンチ、試掘溝）等の略号で適宜表記した。それぞれの番号は各次調査及び各調査区における通し番号である。
7. 遺物実測図の縮尺は土器が1/3、石器類が1/1、1/2及び1/3である。挿図及び写真図版中の番号は実測図の番号と一致している。
8. 出土遺物の色調については、『新版標準土色帖1996年版』の名称を使用した。
9. Fig.1は国土地理院1:25,000地形図「大崎」、「越知」を使用した。
10. 遺構測量は任意座標でおこない、挿図中の北は磁北である。また挿図中のレベル高は海拔高を示す。
11. 発掘調査に際しては、当該土地所有者である西森正起氏・大原光鶴氏・大原喜久子氏・藤原牧子氏・貞岡登志子氏・小田幸三郎氏・山本孝宣氏の全面的な御理解と御協力を賜り、調査を円滑に遂行することができた。記して衷心より謝意を表す。
12. 出土したガラス製品の螢光X線分析に関しては、肥塙隆保氏（奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長）を煩わせ、数々の御教示、ならびに玉稿を賜った。記して衷心より謝意を表す。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、高知県立歴史民俗資料館、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から御助言・御協力を賜り、また次の方々から貴重

- な御助言・御教示を賜った。御芳名を記して衷心より謝意を表す。
- 岡本健児（高知県文化財保護審議会会長）・藤田 等（静岡大学名誉教授）・河瀬正利（広島大学）・藤野次史（広島大学）・川越俊一（奈良国立文化財研究所）・佐川正敏（奈良国立文化財研究所）・深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）・鷲田光一（飯塚市歴史資料館）・藤田三郎（山原本町教育委員会）
14. 発掘作業においては、大原組、社団法人佐川・越知・日高広域シルバー人材センターならびに、近隣にお住まいの方々の御協力を得た。記して衷心より謝意を表す。
15. 整理作業に際しては、次の方々に御尽力いただいた。御芳名を記して衷心より謝意を表す。
川井由香 池本 恵
16. 遺跡の略号はそれぞれ「95-260G」「95-360GⅡ」「95-370GⅢ」とし、出土遺物の注記等にはこれを使用した。
17. 出土遺物等は越知町教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第Ⅲ章 第1次調査	4
第Ⅳ章 第2次調査	25
第Ⅴ章 第3次調査	32
第VI章 総括	48
付編 女川遺跡出土上半円筒（勾玉）ガラスの分析	肥塚隆保

挿図目次

Fig. 1	女川遺跡と周辺の遺跡 (S : 1/25,000)	3
Fig. 2	第1次～第3次調査調査区配置図 (S : 1/500)	5
Fig. 3	第1次調査調査区配置図 (S : 1/500)	6
Fig. 4	TP 1～TP 3 平面図・土層断面図 (S : 1/40)	7
Fig. 5	TP 4～6 平面図・土層断面図 (S : 1/40)	8
Fig. 6	TP 7～9 平面図・土層断面図 (S : 1/40)	10
Fig. 7	TP 10'・11 平面図・土層断面図 (S : 1/40)	11
Fig. 8	第1次調査検出遺構 (S : 1/20)	12
Fig. 9	TP 10 遺物出土状態平面図・同鉛直分布図 (S : 1/20)	14
Fig. 10	第1次調査出土遺物 1 (縄文土器)	15
Fig. 11	第1次調査出土遺物 2 (上器・陶磁器・土製品)	16
Fig. 12	第1次調査出土遺物 3 (石器)	17
Fig. 13	第1次調査出土遺物 4 (石器)	18
Fig. 14	第1次調査出土遺物 5 (石器)	19
Fig. 15	第1次調査出土遺物 6 (石器)	20
Fig. 16	第1次調査出土遺物 7 (石器)	21
Fig. 17	第1次調査出土遺物 8 (石器)	22
Fig. 18	第1次調査出土遺物 9 (石器)	23
Fig. 19	第1次調査出土遺物 10 (石器・ガラス製品・金属製品)	24
Fig. 20	第2次調査グリッド割り図 (S : 1/200)	25
Fig. 21	第2次調査遺構全体図 (S : 1/100)	26
Fig. 22	第2次調査北壁土層断面図 (S : 1/40)	27
Fig. 23	第2次調査搅乱状況図 (S : 1/40)	27
Fig. 24	第2次調査検出遺構 (S : 1/40)	28
Fig. 25	第2次調査出土遺物 1 (土器・陶磁器・土製品)	30
Fig. 26	第2次調査出土遺物 2 (石器)	31
Fig. 27	第3次調査調査区配置図 (S : 1/500)	32
Fig. 28	第3次調査遺構全体図 (S : 1/100)	33～34
Fig. 29	第3次調査 I 区北壁土層断面図 (S : 1/40)	35
Fig. 30	第3次調査 II・III 区土層断面模式図 (S : 1/40)	36
Fig. 31	第3次調査 II 区搅乱状況図・石列平面図 (S : 1/100)	37
Fig. 32	第3次調査 II 区石列平面図 (S : 1/40)	38
Fig. 33	第3次調査検出遺構 1 (S : 1/40)	39
Fig. 34	第3次調査検出遺構 2 (S : 1/20)	39

Fig.35 第3次調査出土遺物1（土器・陶磁器・土製品）	40
Fig.36 第3次調査出土遺物2（石器・金属製品）	41
Fig.37 第3次調査出土遺物3（石器）	42
Fig.38 第3次調査出土遺物4（石器）	43
Fig.39 第3次調査出土遺物5（石器）	44
Fig.40 第3次調査出土遺物6（石器）	45
Fig.41 第3次調査出土遺物7（石器）	46
Fig.42 第3次調査出土遺物8（石器・石製品）	47

表 目 次

表1 女川遺跡と周辺の遺跡一覧	2
表2 第1次調査ピット状遺構計測表	13
表3 第2次調査ピット状遺構群計測表	29
表4 第3次調査ピット状遺構群計測表	41
表5 土器・陶磁器観察表1	50
表6 土器・陶磁器観察表2	51
表7 土器・陶磁器観察表3	52
表8 土錘観察表	52
表9 石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表1	53
表10 石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表2	54

写真図版目次

- 巻頭図版 1 第1次調査TP10出土半円筒状ガラス製品
巻頭図版 2 第1次調査TP10出土半円筒状ガラス製品
巻頭図版 3 第1次調査出土遺物
P L. 1 女川遺跡遠景
P L. 2 第1次調査TP1～TP4
P L. 3 第1次調査TP4～TP8
P L. 4 第1次調査TP8～TP11
P L. 5 第2次調査調査前状況
P L. 6 第2次調査遺構検出状況
P L. 7 第2次調査遺構完掘状況
P L. 8 第2次調査調査状況、検出遺構
P L. 9 第3次調査I区調査前状況
P L. 10 第3次調査III区調査前状況、同I区遺構完掘状況
P L. 11 第3次調査II区遺構完掘状況、同III区遺構完掘状況
P L. 12 第3次調査調査状況、検出遺構
P L. 13 出土遺物（土器・陶磁器）、同（石器）
P L. 14 出土遺物（石器）、同（土器・陶磁器）
P L. 15 出土遺物（石製品・ガラス製品・金属製品）、同（石器・石製品）
P L. 16 出土遺物（石器）

第Ⅰ章 調査に至る経過

女川遺跡は高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかに所在する。昭和51年刊行の『全国遺跡地図高知県』の時点での登載されている遺跡であり、縄文時代後期を中心とする石器・石槍・石斧・石核・剥片・土器、及び土師器・須恵器などが採集されていた。平成4~5年度実施の高知県遺跡詳細分布調査―高岡ブロッカーに伴う現地踏査の際には、新たに陶器など中世の遺物も採集されたことから、「北屋敷」等の地名にみられるような屋敷跡の存在も考えられることとなり、遺跡の年代、性格、範囲等、遺跡台帳の情報が整備されるに至った。

平成7年、女川遺跡の範囲内において、複数の開発事業の予定されていることが判明した。上記のとおり女川遺跡はかねてから知られている遺跡であったが、こと發掘調査は未実施のため、地中の状況については根拠となる資料をもちえなかった。そこで、来るべき開発行為に対処できるよう、遺跡の基礎データを収集するための發掘調査を高知県教育委員会と協議のうえ準備した。これは越知町教育委員会が主体となって実施する、初の埋蔵文化財發掘調査であった。調査に際しては、高知県教育委員会ならびに財團法人高知県文化財团埋蔵文化財センターの指導を受け、平成7年12月5日~12月21日の期間で実施した。發掘調査面積は4.6m²であった。この調査が女川遺跡の第1次の發掘調査であり、以下、本文中では「第1次調査」と表記する。

明けて平成8年1月、遺跡の範囲内における個人住宅の建設計画に直面した。越知町教育委員会は、第1次調査の結果をふまえた上で高知県教育委員会と協議し、当該計画地には縄文時代及び中世の遺跡の存在が濃厚であり、計画の実施に際しては記録保存を目的とした發掘調査が必要であると判断された。これらの経緯を関係者に説明し、十分に理解していただき、全面的な協力を得ることができたことから、緊急に發掘調査（以下、「第2次調査」と表記）を実施することとなった。發掘調査は越知町教育委員会が主体となり、財團法人高知県文化財团埋蔵文化財センターの指導を受けた。調査期間は平成8年2月16日~2月29日、發掘調査面積は1.75m²であった。

一方これと同じ頃、越知町建設課による、町道女川東屋敷線の建設計画が進められていた。この路線は、女川遺跡の中枢部をL字形に通過するものであり、事業計画地近辺に関する第1次調査の結果によれば、縄文時代及び中世の遺跡の存在が明らかであった。越知町教育委員会は高知県教育委員会と協議し、事業の実施に際しては事前の發掘調査によって記録保存を果たすことが必要との結論に至った。これに基づき、町建設課の全面的な協力を得て、平成8年3月4日~3月16日の期間、財團法人高知県文化財团埋蔵文化財センターの指導のもと、越知町教育委員会が發掘調査（以下、「第3次調査」と表記）を実施した。發掘調査面積は2.07m²であった。

また、平成8年3月25日には、平成7年度の3次の調査の総括として、報道機関に調査成果の発表をおこなった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

女川遺跡は高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかに所在し、仁淀川右岸の河岸段丘（中位段丘）上に立地する。⁽¹⁾女川遺跡の所在する越知町は、東西に長い高知県の中西部に位置している。町域のはば中央を県下第2の河川である仁淀川が大きく蛇行しながら貫流しており、その流域及び支流域を中心に現集落が形成されている。河岸段丘の形成は、仁淀川と支流・桐見川の合流する越知周辺において最も顕著であり、中でも人口の集中する平野部は、町内最大の面積を有する中位段丘となっている。⁽²⁾

越知町における遺跡の分布は、仁淀川本・支流域の河岸段丘の存在に密接な関係をもっており、城郭跡を除くほとんどの遺跡は中位段丘上に立地している。分布の特徴としては、①越知周辺への各時代の遺跡の集中、②片岡周辺における中世城郭の偏在、という2点を挙げることができる。女川遺跡は、越知周辺に集まる遺跡群の一角に位置している。

越知町内において女川遺跡に隣接する遺跡としては、下渡遺跡、文徳遺跡、遊行寺遺跡などを挙げることができる。下渡遺跡は女川遺跡の西方、小谷を挟んだ段丘上に位置する縄文時代遺跡で、縄文時代早期の押型土器や石器等の資料が表面採集されている。文徳遺跡は越知町文徳に所在する縄文時代・中世の遺跡で、下渡遺跡と同様に縄文時代早期の土器・石器等が採集されている。遊行寺遺跡は越知町遊行寺に所在する縄文時代遺跡で、石器剥片等が採集されている。

また、視点を町外に転ずると、町内で合流する柳瀬川を遡れば城ノ台洞穴遺跡（高岡郡佐川町内、縄文時代早期）、国史跡・不動ケ岩屋洞窟遺跡（高岡郡佐川町西山、縄文時代草創期・早期）へと通じ、これに至るまでの流域には大田川遺跡、坂東遺跡などの縄文時代遺跡が数珠つなぎに分布する。このように越知・佐川両町周辺には、仁淀川中流域における縄文時代遺跡の1集中地帯が形成されている。

註

(1) 越知町史編纂委員会『越知町史』高知県高岡郡越知町 1984年

(2) 同註⁽¹⁾

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
★	女川遺跡	縄文・弥生・中世・近世	7	文徳古墓	中世	15	西ノ芝遺跡	中・近世
			8	文徳遺跡	縄文～古墳・近世	16	中町遺跡	縄文
1	清水遺跡	縄文・弥生・中世	9	遊行寺遺跡	縄文・近世	17	馬ヶ崎城跡	中世
			10	柴尾遺跡	古墳・中世	18	城戸遺跡	縄文
2	本村遺跡	弥生・中世	11	天忠寺跡	中世	19	清水城跡	中世
3	西岡遺跡	縄文・近世	12	柴尾城跡	中世	20	下渡遺跡	縄文・中世
4	ヤケ坂遺跡	弥生	13	木倉通遺跡	古墳	21	東光寺跡	中世
5	後山城跡	中世	14	越知遺跡	弥生			
6	文徳城跡	中世						

表1 女川遺跡と周辺の遺跡一覧

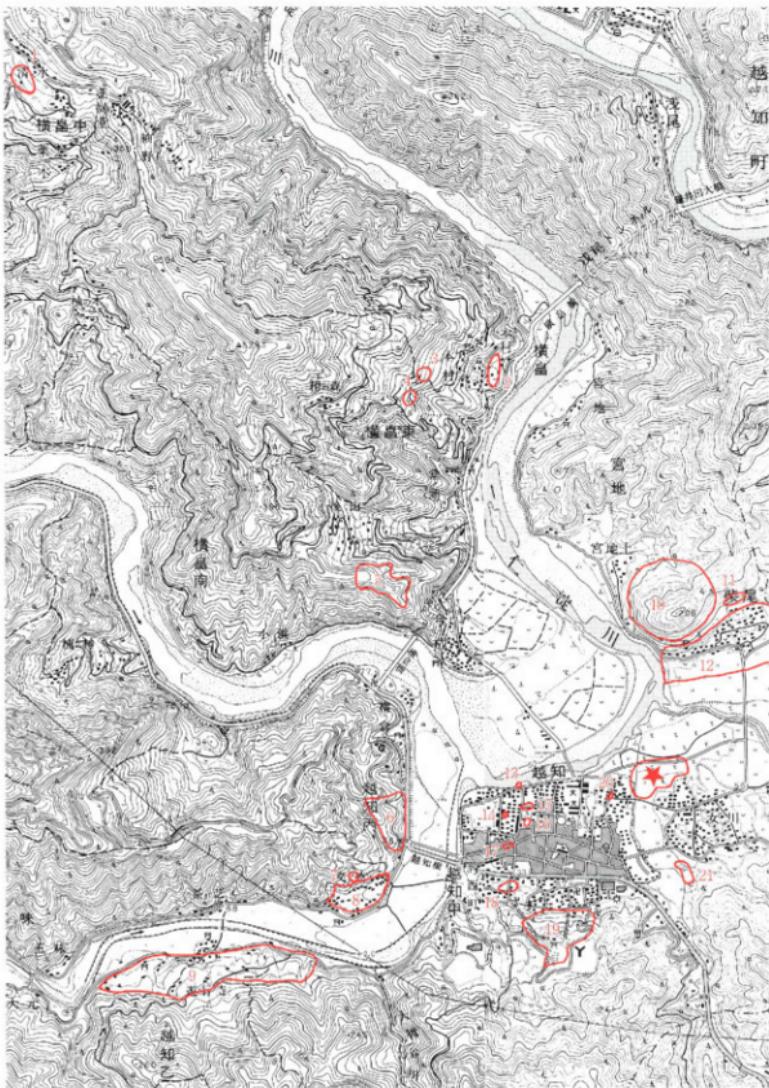


Fig. 1 女川遺跡と周辺の遺跡 (S : 1/25,000)

第Ⅲ章 確認調査（第1次調査）

(1) 調査の概要

從来より多くの縄文時代遺物が採集されていた女川遺跡について、遺跡の範囲・時代・性格及び遺存状態等を把握し、將來の遺跡保護に活用し得る基礎的資料を収集することを目的として、本次調査を実施した。調査期間は平成7年12月5日～12月21日、発掘調査面積は46m²である。

(2) 調査の方法

2×2 mの大きさを基本とする調査区（試掘坑=TP）を11箇所配置して、調査を実施した。表土層及び無遺物層の掘り下げは主に重機（バックホー）を使用しておこない、遺物包含層・遺構の掘り下げは人力でおこなった。表土層及び遺物を含むと考えられた層の土壤（遺構埋土を含む）は一部を除いて5mmのフルイによって選別し、微細な遺物の採集に努めた。完掘後は、遺構平面図・堆積土層断面図を作成し、あわせて写真撮影によって記録をおこなった。

なお、女川遺跡の発掘調査についてはこれが嚆矢であり、その様相は全く不明であったため、搅乱坑をも遺構然として完掘し、さらに後々の基礎資料とするべく、遺構然として図化・記録をおこなっている。第2次調査以降の面的な発掘調査の進展に伴い、第1次調査で遺構としたものの性格が順次判明することとなったが、調査時点での遺構名は変えずに使用した。第1次調査を踏まえて、第2次調査以降は搅乱坑の扱いを適宜変えていった。

(3) 調査の成果

1. 各調査区の概要

TP 1 (Fig. 4)

地山とみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は、第IV層上面でピット状遺構2基を検出した。(Fig. 8・表2) 遺構の年代は不明。遺物は、第I・II層から土師質土器、瓦器、陶磁器、瓦片、石器碎片等が出土した。

TP 2 (Fig. 4)

TP 1・第IV層に相当するとみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は、第IV層上面でピット状遺構2基(Fig. 8・表2)、壁面でピット状遺構2基を検出した。第IV層上面の遺構の年代は不明。壁面で確認したピット状遺構は、表土中から掘り込まれた可能性があり、搅乱坑と考えられる。遺物は、第I層から土師質土器、青磁、陶磁器、土錘、石錐、叩石、石器碎片等が出土し、青磁1点、土錘1点、石錐1点、叩石1点を図示した。

TP 3 (Fig. 4)

地山とみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は、第IV層上面でピット状遺構1基を検出した。(Fig. 8・表2) 遺物は、第I層～第III層から弥生土器、土師質土器、瓦器、備前焼、陶磁器、土錘、瓦片、不明石製品、石器碎片等、第V層から弥生土器、上師質土器、石器碎片等

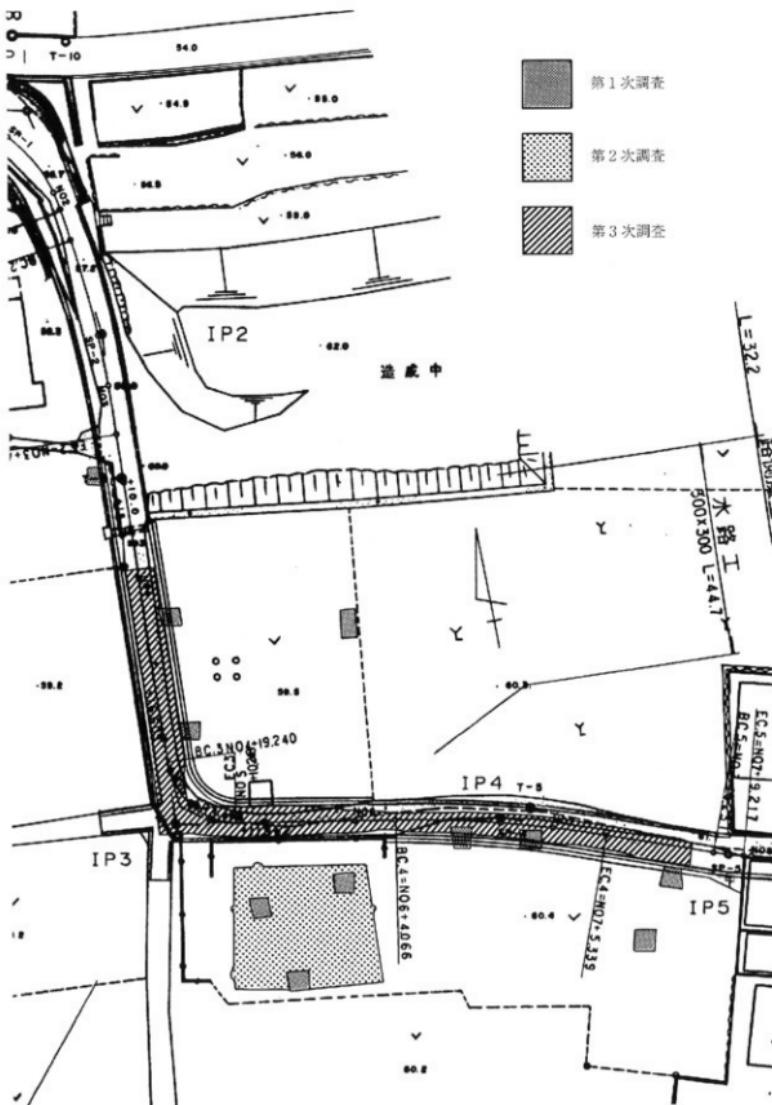


Fig. 2 第1次～第3次調査調査区配置図 (S:1/500)



Fig. 3 第1次調査調査区配置図 (S : 1/500)

が出土し、土師質土器1点、陶器1点、土錘1点、不明石製品1点を図示した。第IV層上面は中世以降の遺構検出面、第V層は中世までの遺物包含層である。

TP 4 (Fig. 5)

地山とみられる粘疊土層までの確認をおこなった。遺構は、第IV層上面でピット状遺構1基を検出した。(Fig. 8・表2) 遺物は、第I層・第III層から弥生土器、土師質土器、瓦器、備前焼、陶磁器、瓦片、石鎚、剥片、碎片等が出土し、陶器1点、石鎚2点、剥片1点を図示した。TP 3同様、第IV層上面は中世以降の遺構検出面である。

TP 5 (Fig. 5)

TP 3・TP 4の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。TP 5以降、TP 4以西に位置する試掘坑は、すべて第II層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。遺構は、第III層上面で土坑状遺構1基(SK 1)を検出した。SK 1は、床面に多数の小穴が穿

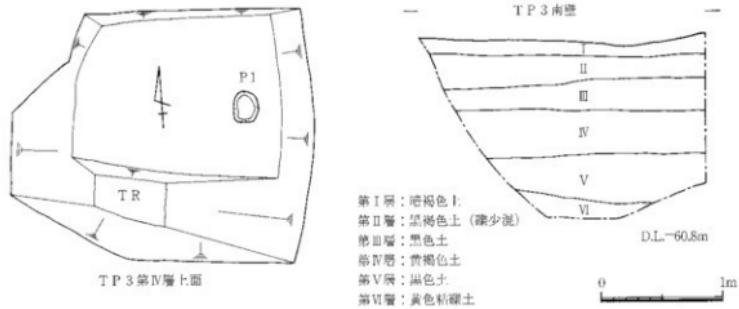
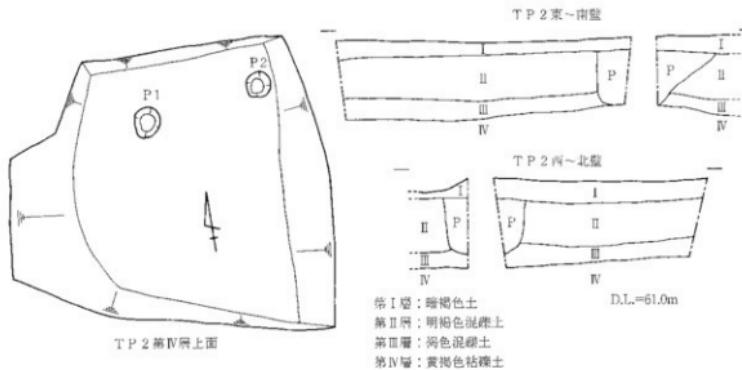
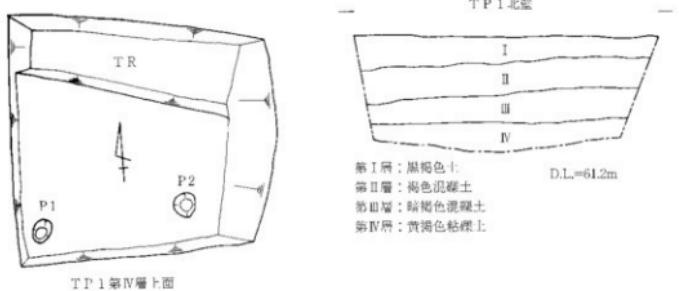
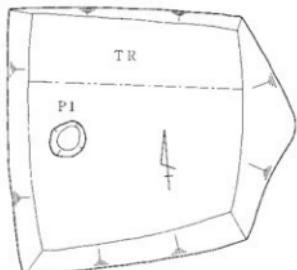
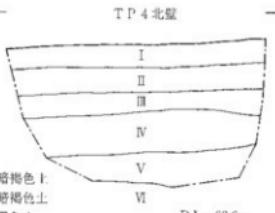


Fig. 4 TP 1 ~ TP 3 平面図・土層断面図 (S : 1/40)



TP 4 第IV層上面



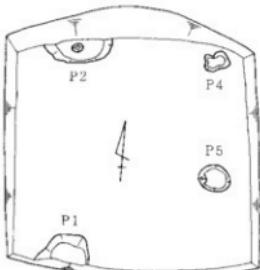
第Ⅰ層：暗褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土
第Ⅲ層：黑色土
第Ⅳ層：黄褐色粘質土
第Ⅴ層：黑色土
第Ⅵ層：黄色粘壤土



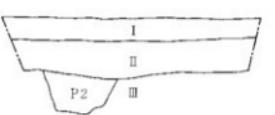
TP 5 第Ⅱ層上面



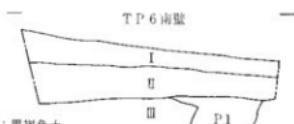
第Ⅰ層：黑褐色土
第Ⅱ層：黑色土・黄褐色土混（搅亂土）
第Ⅲ層：黄褐色土



TP 6 第Ⅱ層上面



第Ⅰ層：黑褐色土
第Ⅱ層：黑色土・黄褐色土混（搅亂土）
第Ⅲ層：黄褐色土
D.L.=60.2m



0 1m

Fig. 5 TP 4 ~ 6 平面図・土層断面図 (S : 1/40)

たれており、植物の根による搅乱坑と考えられる。遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から縄文土器、弥生土器、土師質土器、瓦器、備前焼、陶磁器、瓦片、錢貨、石器剥片、碎片等、SK1から縄文土器、弥生土器、土師質土器、石器碎片等が出土し、縄文土器1点、土師質土器1点、錢貨1点を図示した。

TP6 (Fig.5)

TP3～TP5の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。遺構は、第Ⅲ層上面でビット状遺構4基を検出し、2基を図示した。(Fig.8・表2) P1・P4・P5の年代は不明。P2は近世以降の所産である。遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器、瓦器、陶磁器、瓦片、石鏃、剥片、碎片等が出土し、磁器1点、石鏃1点を図示した。

TP7 (Fig.6)

TP3～TP6の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。遺構は、第Ⅲ層上面でビット状遺構4基を検出した。(Fig.8・表2) 遺構は中世以降の所産である。第Ⅲ層上面には溝状の搅乱坑が穿たれている。遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器、瓦器、陶磁器、土錘、瓦片、石鏃、剥片、碎片等が出土し、磁器2点、土錘1点、石鏃1点を図示した。

TP8 (Fig.6)

TP3～TP7の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。遺構は、第Ⅳ層上面で溝状遺構3条を検出した。これは後の調査によって、この周囲一帯に穿たれた筋状の搅乱坑と判明した。遺物は、第Ⅰ層から弥生土器、土師質土器、瓦器、青磁、陶磁器、土錘、瓦片、2次加工ある剥片、碎片等が出土し、土師質土器1点、青磁1点、2次加工ある剥片1点を図示した。

TP9 (Fig.6)

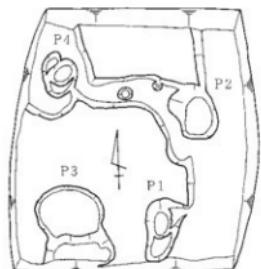
TP3～TP8の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。遺構は、第Ⅲ層上面でビット状遺構4基を検出し、1基を図示した。(Fig.8・表2) 遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から弥生土器、土師質土器、瓦器、備前焼、陶磁器、瓦片、石器剥片、碎片等が出土した。ビット状遺構4基の中で、P2のみは埋土が異なり、中世以前(縄文時代?)の所産の可能性がある。他の3基は中世以降の所産と考えられる。

TP10 (Fig.7)

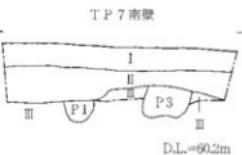
TP3～TP9の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。

遺構は、第Ⅲ層上面で土坑状遺構1基(SK1)を検出した。(Fig.9)

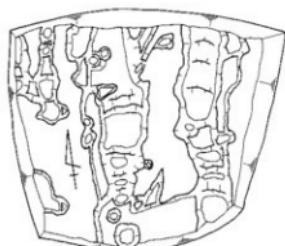
遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から縄文土器、弥生土器、須恵器、瓦器、備前焼、青磁、陶磁器、瓦片、石鏃、石錐、尖頭器?、スクレーパ、2次加工ある剥片、石錘?、台石、碎片、鉛玉?等、



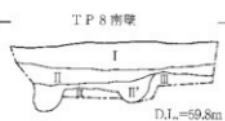
TP 7 第Ⅲ層上面



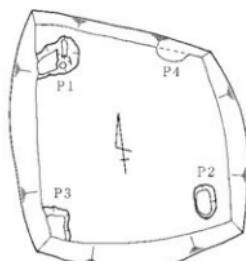
第Ⅰ層：黑褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黃褐色土混（擾亂土）
第Ⅲ層：黃褐色土



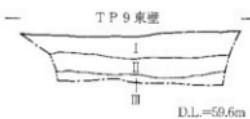
TP 8 第Ⅲ層上面



第Ⅰ層：黑褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黃褐色土混（擾亂土）
第Ⅲ層：暗褐色土・黃褐色土混（擾亂土）
第Ⅳ層：黃褐色土



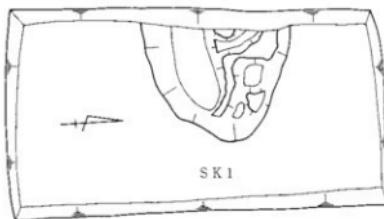
TP 9 第Ⅲ層上面



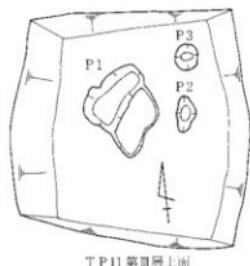
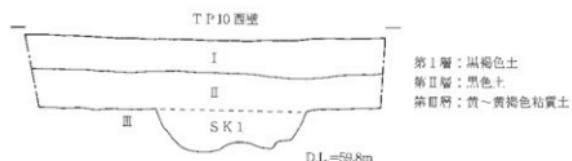
第Ⅰ層：黑褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黃褐色土混（擾亂土）
第Ⅲ層：黃褐色土



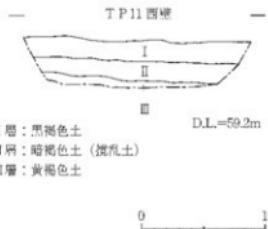
Fig. 6 TP 7 ~ 9 平面図・土層断面図 (S : 1/40)



T P 10 第Ⅲ層上面



T P 11 第Ⅲ層上面



0 1m

Fig. 7 T P 10・11平面図・土層断面図 (S : 1/40)

SK 1 から縄文土器、弥生土器、石鏃、尖頭器？、スクレーパ、2次加工ある剥片、石核、石錐、叩石、ガラス製品、が出土し、縄文土器24点、弥生土器3点、瓦器1点、石鏃17点、尖頭器？1点、石錐1点、スクレーパ3点、2次加工ある剥片3点、石錐？1点、凹石1点、鉛玉？1点を図示した。

第I層・第II層にはきわめて多くの縄文時代・弥生時代遺物が含まれるが、一方で瓦片等も混じっており、TP 3～TP 9と同様に擾乱を免れていない。しかし、縄文時代・弥生時代遺物の出土点数は、他の試掘坑に比べて圧倒的に多いことから、この周囲に両時代の遺跡の分布することが推察される。

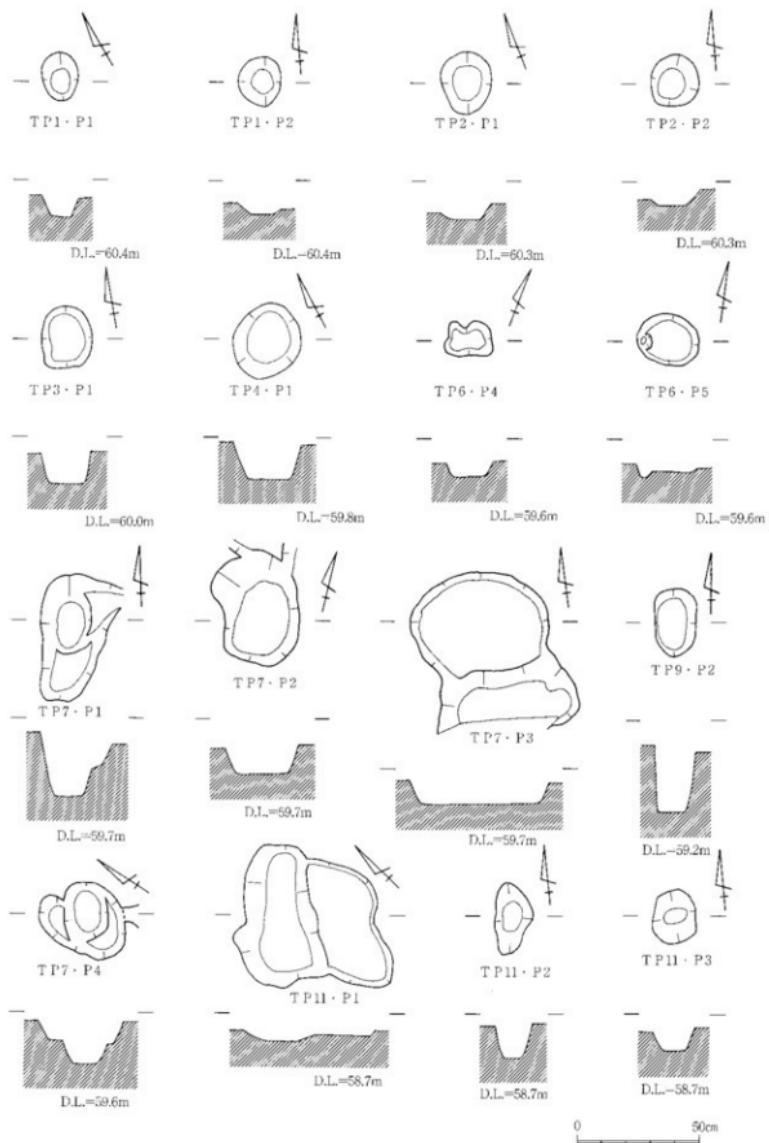


Fig. 8 第1次調査検出遺構 (S : 1/20)

遺構名	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	出土遺物	年代
TP 1-P 1	楕円形	0.19 × 0.15	0.095	—	—
TP 1-P 2	不整円形	0.20 × 0.17	0.067	—	—
TP 2-P 1	不整円形	0.26 × 0.21	0.066	—	—
TP 2-P 2	不整円形	0.21 × 0.20	0.061	—	—
TP 3-P 1	不整椭円形	0.25 × 0.20	0.130	土師質土器	中世～
TP 4-P 1	楕円形	0.31 × 0.28	0.157	土師質土器	中世～?
TP 6-P 4	不整形	0.20 × 0.14	0.063	—	—
TP 6-P 5	楕円形	0.25 × 0.21	0.028	—	—
TP 7-P 1	楕円形	0.51 × 0.28	0.263	土師質土器, 瓦器, 破片	中世～
TP 7-P 2	不整椭円形	0.48 × 0.31	0.290	土師質土器, 破片	中世～
TP 7-P 3	不整形	不明 × 0.57	0.183	土師質土器	中世～
TP 7-P 4	不整形	0.34 × 0.32	0.170	土師質土器, 破片	中世～
TP 9-P 2	不整椭円形	0.28 × 0.16	0.278	土器細片	?
TP 11-P 1	不整形	0.64 × 0.58	0.046	土師質土器	中世～
TP 11-P 2	不整椭円形	0.29 × 0.16	0.149	土師質土器	中世～
TP 11-P 3	不整椭円形	0.22 × 0.17	0.102	—	—

表2 第1次調査ピット状遺構計測表

TP 11 (Fig. 7)

TP 3～TP 10の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。TP 3～TP 10とはやや異なった様相を呈するが、第Ⅱ層まで耕作等に伴う搅乱が及んでいる。黄褐色土層上面までの深度はひときわ浅く、遺構検出面の削平は著しい。遺構は、第Ⅲ層上面でピット状遺構3基を検出した。(Fig. 8・表2) 遺構は中世以降の所産である。遺物は、第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器、瓦器、陶磁器、瓦片、2次加工ある剥片、叩石？、破片等が出土し、2次加工ある剥片1点、剥片？1点、叩石？1点を図示した。

2. 遺構

検出遺構のうち、ピット状遺構(P) 16基、土坑状遺構(SK) 1基を図示した。

(1) ピット状遺構 (Fig. 8・表2)

ピット状遺構16基の計測値、出土遺物等については、表2にまとめた。

(2) 土坑状遺構

TP 10-SK 1 (Fig. 7・9)

TP 10の西壁際で、全体の約2分の1を検出した。平面形は楕円形？で、長径不明、短径1.23m、検出面からの深さは35cmである。埋土は暗褐色土である。

遺物は、縄文土器、弥生土器、石鎌、尖頭器？、スクレーパ、2次加工ある剥片、破片、石核、石錐、叩石、半円筒状ガラス製品が出土しており、縄文土器9点、弥生土器5点、石鎌6点、尖

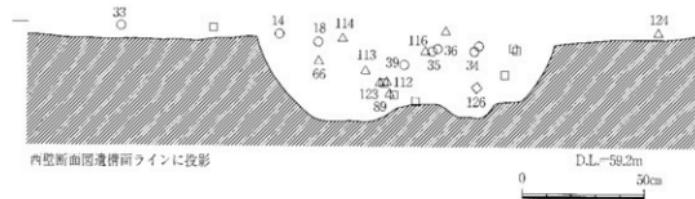
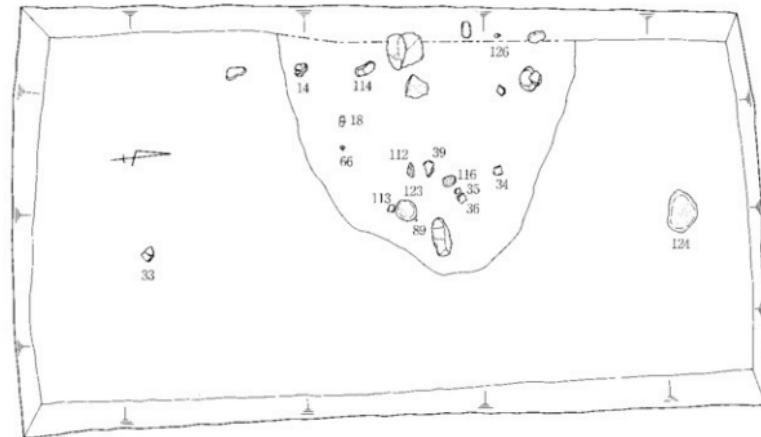


Fig. 9 TP 10遺物出土状態平面図・同鉛直分布図 (S : 1/20)

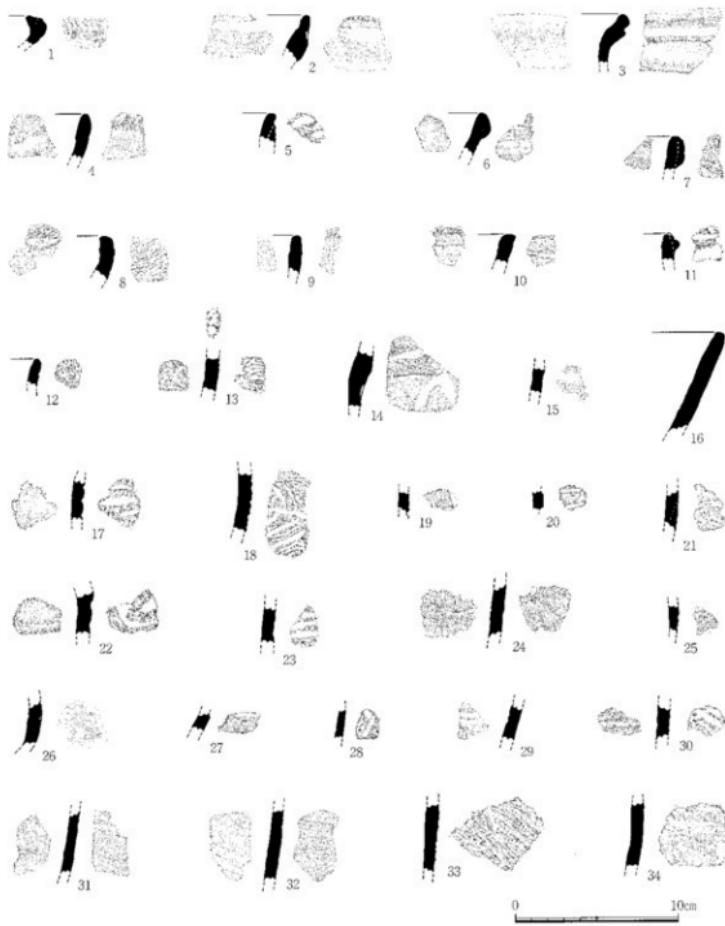


Fig.10 第1次調査出土遺物1（縄文土器）

頭器？1点、スクレーパ1点、2次加工ある剥片5点、石核3点、石錘2点、叩石1点、半円筒状ガラス製品1点を図示した。

出土土器から、TP10—SK1は弥生時代前期末の所産と考えられる。遺構からは縄文後期土器も出土しているが、これは遺構の年代を示すものではなく、弥生前期の旧地表面付近にあったものが、遺構の埋没の際に流入したものと考えられる。したがって、両時代の旧地表面はきわめ

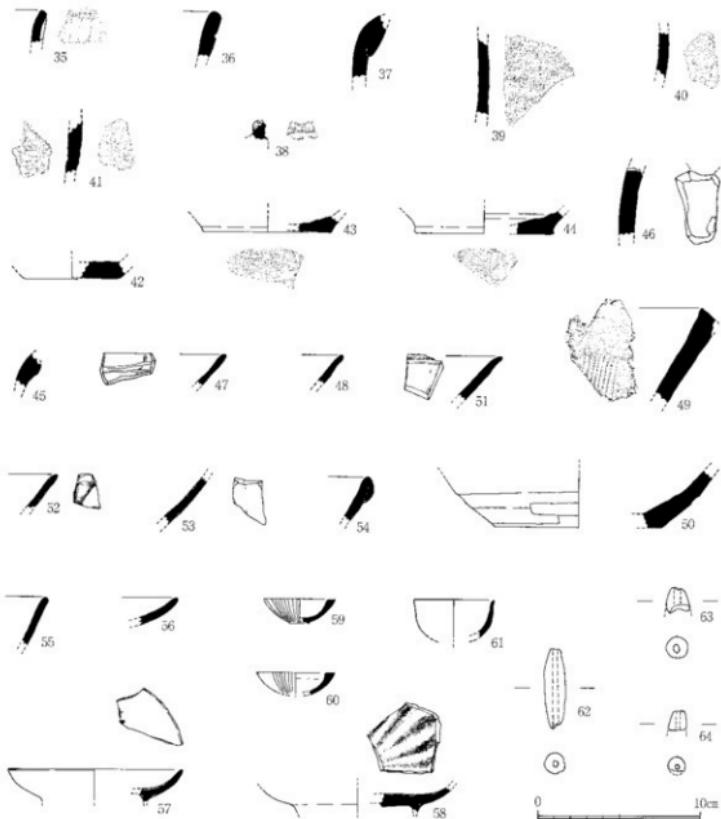


Fig.11 第1次調査出土遺物2（土器・陶磁器・土製品）

て近接した位置関係にあったものと理解される。また、同遺構からは多数の剥片石器とその未製品、ならびに素材となった刺片・石核類と多量の微細な碎片が出上しており、同遺構は石器製作に関わる遺構と考えられる。剥片石器の石材はチャート、サスカイト、凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）？等であり、このうち剥片・石核類から製品までのセット関係が明瞭で、量的にも支配的なのは凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）で、赤色のチャートがこれに次いでいる。凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）を素材として、主に製作されたものは大型の石鋤であり、これは弥生前期土器に伴う蓋然性が高い。赤色チャートも同様である。赤色以外のチャートとサスカイトは、縄文後期・弥生前期の2時期に共通の石器石材とみられ、土器と同様の経過で混入したものも含まれると考えられる。

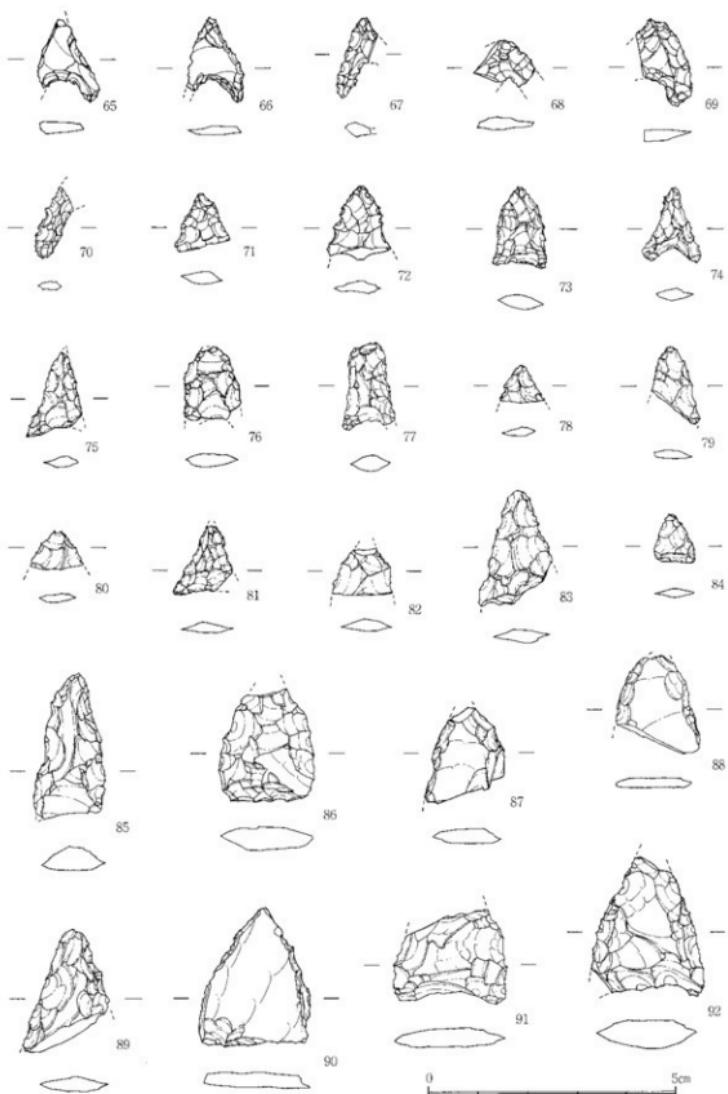


Fig.12 第1次調査出土遺物3（石器）

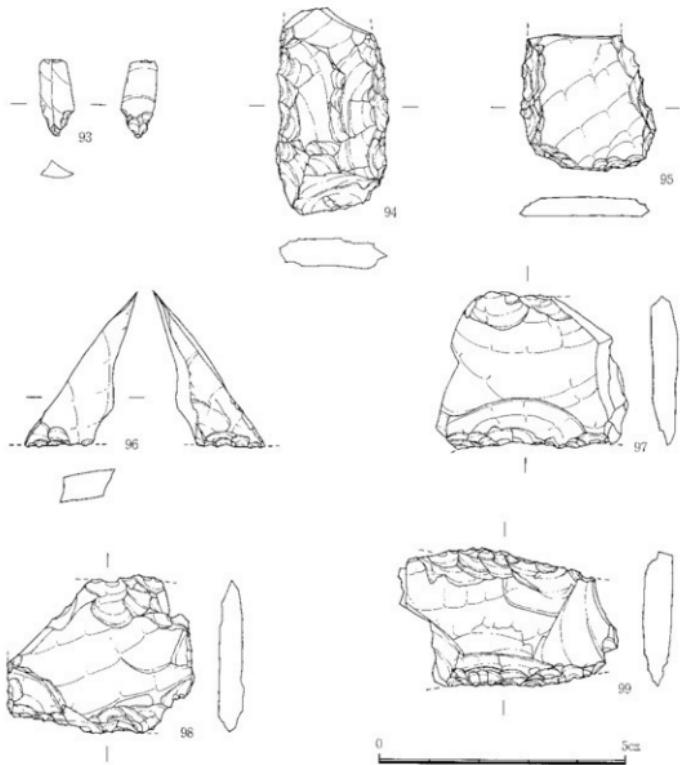


Fig.13 第1次調査出土遺物4（石器）

3. 遺物

(1) 土器・陶磁器・土製品 (Fig. 10・11)

縄文土器、弥生土器、土師質土器、瓦器、偏前焼、青磁、白磁、陶器、磁器、土鍤、合計64点を図示した。

1～34は縄文土器で、1～16が口縁部片、17～34が胴部片である。1は硬質の原体による縄文が施されており、船元式土器か。2～5・14・15・22は平城式土器である。30は弥生土器の可能性がある。

35～42は弥生土器である。41以外は弥生前期のものと考えられる。41は弥生中期以降の可能性があり、唯一TP10-SK1に混入したものとみられる。43～46は土師質土器である。45は鍋？、

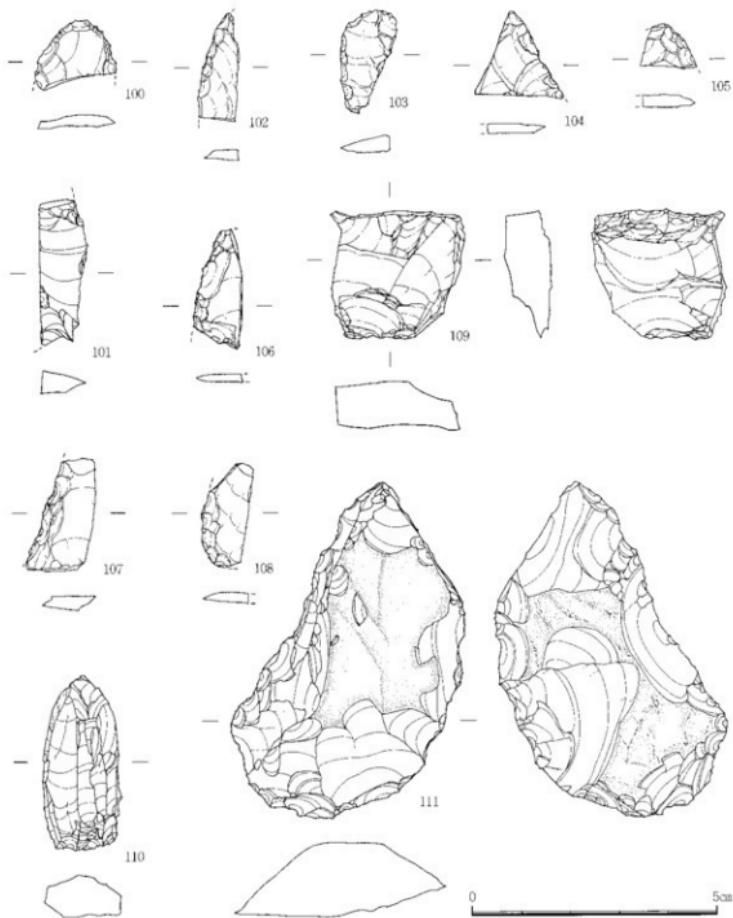


Fig.14 第1次調査出土遺物5（石器）

46は火鉢で、ともに近世の所産と考えられる。47・48は和泉型の瓦器・椀で、13世紀前半頃のものと考えられる。⁽²⁾49・50は備前焼で、50は須恵器の可能性がある。51～53は青磁・碗で、51は龍泉窯系I類—2もしくは4、52・53は龍泉窯系I類—5に分類される。⁽³⁾54は白磁・碗で、玉縁状の口縁部を有し白磁IV類に分類される。⁽⁴⁾55・56は陶器である。57～61は磁器で、59・60は肥前の紅皿である。⁽⁵⁾62～64は土錘である。

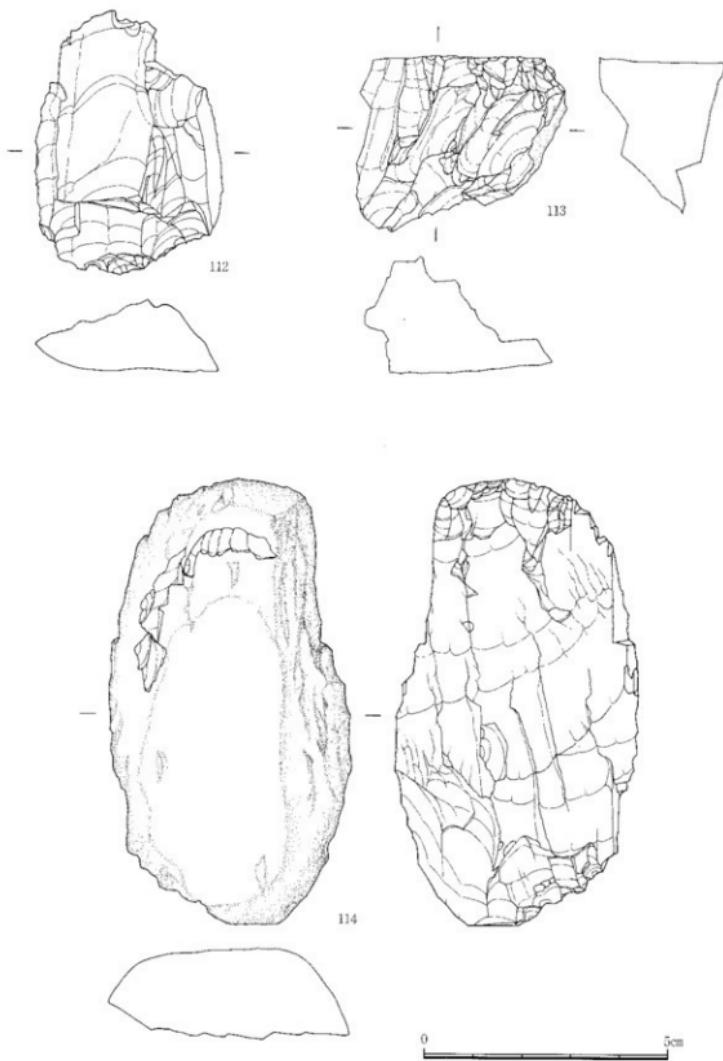


Fig.15 第1次調査出土遺物6（石器）

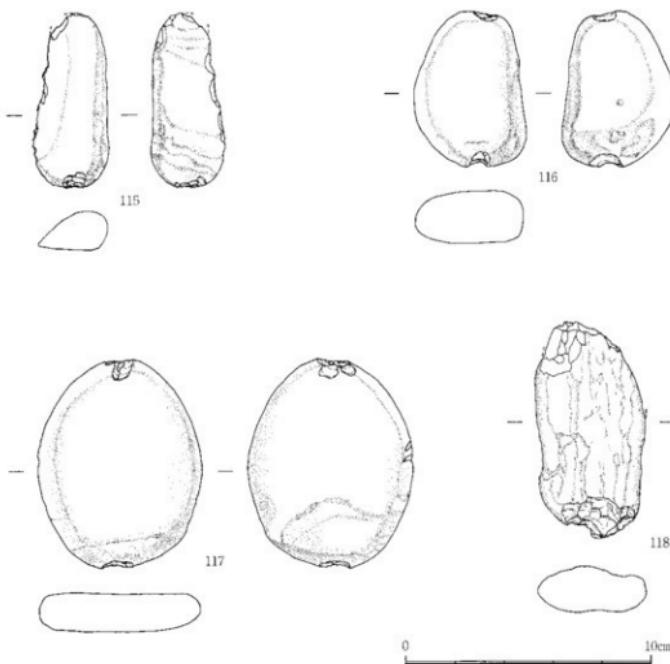


Fig.16 第1次調査出土遺物7（石器）

(2) 石器・石製品 (Fig. 12~19)

石鎌、石錐、尖頭器？、スクレーパ、2次加工ある剥片、剥片、石核、石錐、叩石、磨石、白石、不明石製品、合計61点を図示した。

65~92は石鎌である。65は未製品である。65~69・71~73はチャート製、70は珪質頁岩？製、74~83はサヌカイト製、84~92は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。

93は石錐で、赤色チャート製である。94・95は尖頭器？で、凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。96~99はスクレーパである。96はサヌカイト製で、石庖丁片か。97~99は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製で、99は尖頭器の可能性がある。

100~109は2次加工ある剥片である。100・101はチャート製、102・103はサヌカイト製、104~109は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。100・102・106・108は石鎌未製品とみられる。104・105・107は石錐片か。109は石核の可能性がある。110はチャート製の剥片で、未製品の可能性がある。111はチャート製の剥片もしくは石核である。112~114は石核で、いずれも疊皮面を有す。112は赤色チャート製、113・114は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。

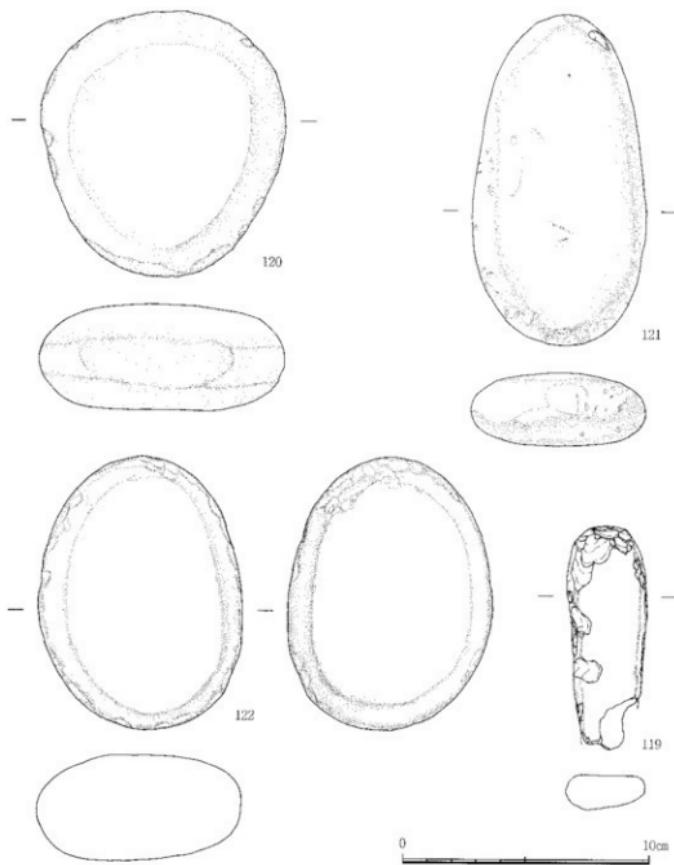


Fig.17 第1次調査出土遺物8（石器）

115～117は石錘で、いずれも長軸両端部を打ち欠く。115は泥岩製、116・117は砂岩製である。118は結晶片岩製で、石錘か。119は結晶片岩製の性格不明の石器で、叩石か。120は花崗岩製の磨石で、表面は赤変している。121～123は砂岩製の叩石である。124は砂岩製の台石である。125は滑石製？の不明石製品である。円柱状を呈し、縦位に溝状の凹み1条がある。

(3) ガラス製品 (Fig. 19)

126は半円筒状のガラス製品である。半截した管玉状を呈するが、そうするときわめて孔の大き

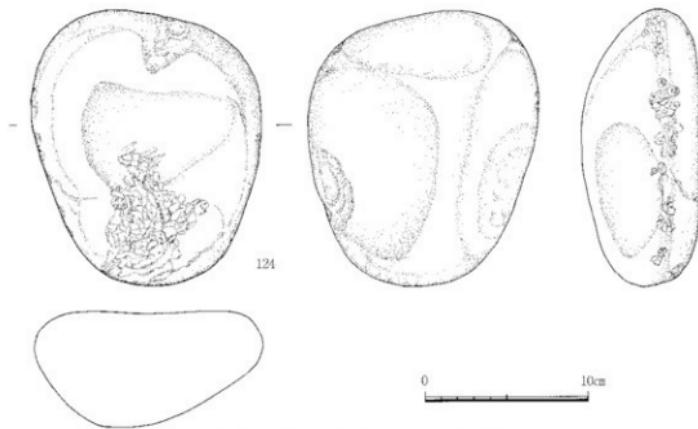
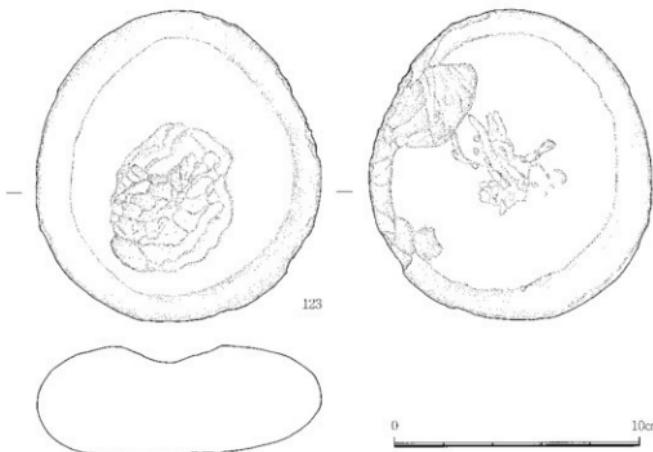


Fig.18 第1次調査出土遺物9（石器）

い管玉ということになる。表面は全面が滑面をなしており、半截した裁断面を研磨したものか、あるいは本来このような形状であるのか、判然としない。上端面と下端面は平行ではなく、下端面が縦軸方向に対して斜交する。したがって、上端面は本来の形を留めているということが、可能性として考えられ、一方、下端面は折損後に研磨されたということが、可能性として考えら

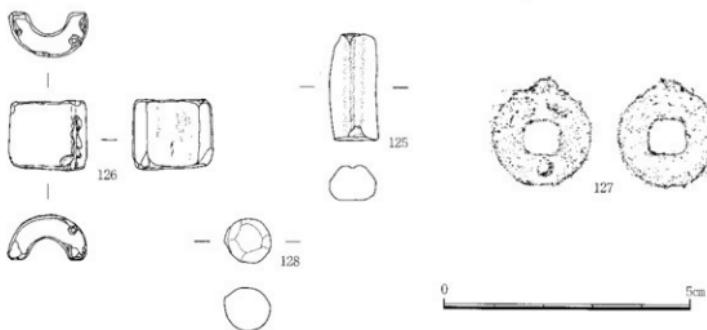


Fig.19 第1次調査出土遺物10（石器・ガラス製品・金属製品）

れる。すなわち、本米の形状を留める完形品であるのか、あるいは何らかの破損に伴う再生・再加工品であるのか、外見からだけでは判断できない。また、外面からみて右端部側には綫位に径1mmの小孔があり、その外面側は下端側から大きく破損し、開口している。この小孔の存在と、その破損により、現形状で垂飾品として使用されたと考えられる。

(4) 金属製品 (Fig. 19)

127は鉄鏡で、両面とも無銘。上端部にバリ跡？が付く。128は鉛玉？である。

註

- (1) 凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）については、安井敏夫氏（越知町企画課横倉山自然交流センター準備室）に御教示いただいた。
- (2) 尾上実・森島康雄・近江俊秀「日土器・陶磁器 6. 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年
- (3) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978年（『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集追悼論文集—』森田勉氏遺稿集追悼集刊行会 1995年 所収）
- (4) 同註(3)
- (5) 有田町史編纂委員会『有田町史 古窯編』佐賀県西松浦郡有田町 1988年

第Ⅳ章 第2次調査

(1) 調査の概要

女川遺跡の範囲内で実施される個人住宅の建築に伴って、その影響を受ける埋蔵文化財の記録保存を目的として本次調査を実施した。調査期間は平成8年2月16日～2月29日、発掘調査面積は175m²である。(Fig.2)

(2) 調査の方法

表土層、無遺物層の掘削は、主として重機（バックホー）を使用しておこない、遺物の含まれる層の掘り下げ、及び遺構の検出・掘り下げは人力によっておこなった。遺物を含むと考えられた層の土壌（遺構埋上を含む）は5mmのフリイによって選別し、微細な遺物の採集に努めた。

遺構調査に際しては、調査区の形状にあわせた任意座標を設定し、これに基づく一辺4mの方眼区画（グリッド）により調査区を分割した。(Fig. 20) 個々のグリッドの名称は、まず北・南方向をA行～D行、西→東方向を1列～5列とし、「(アルファベット)+(数字)」でグリッド名を表記することとした。遺物の取上げ、及び遺構の命名は、このグリッドに基づいておこなった。

遺構の検出状態・完掘状態の写真撮影を隨時おこない、完掘後は、遺構平面図・堆積土層断面図等を作成した。

なお遺構名は、遺構検出時点でピット状遺構を「P」、搅乱坑を「K」と命名した。中にはその完掘後に「K」から「P」へ転じたものもあるが、当初の遺構名のままで改称はしていない。

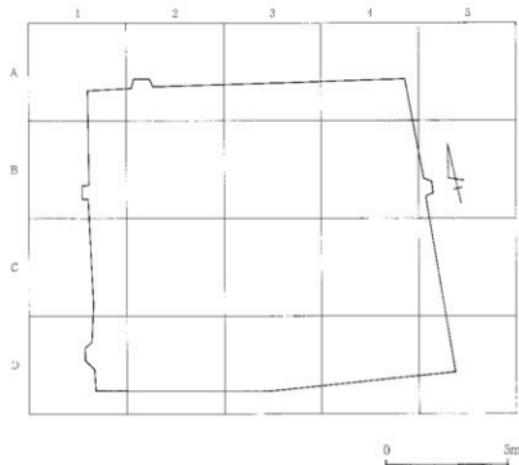


Fig.20 第2次調査グリッド割り図 (S:1/200)

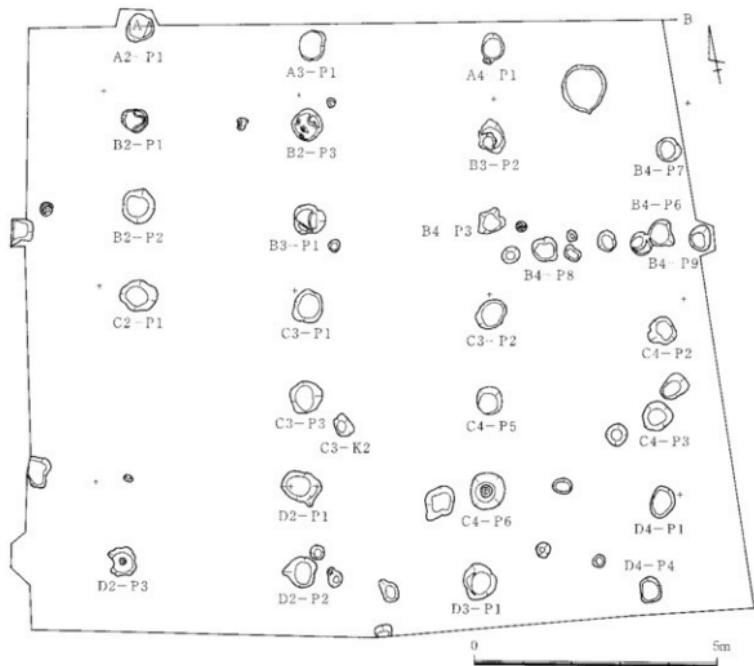


Fig. 21 第2次調査遺構全体図 (S : 1/100)

(3) 調査の成果

1. 層序 (Fig. 22)

本次の調査において確認された層序は、第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：黒褐色土、第Ⅲ層：黄褐色粘質土である。

第Ⅰ層は表土層で、第Ⅱ層は表土層と分離される搅乱層である。第Ⅲ層の上面は本次の遺構検出面で、第Ⅱ層間連の搅乱坑が顕著に認められる。搅乱坑は概して浅いが (Fig. 23・24)、平面形状がバックホーの爪形を呈すものが多い。調査区はかつて桑畠であったとのことであり、その改変に伴って重機で抜根した際に、これらの搅乱坑が刻まれたものと推察される。

2. 遺構 (Fig. 21)

第Ⅲ層上面において、ピット状遺構51基を検出し、出土遺物を示したもの10基を図示した。

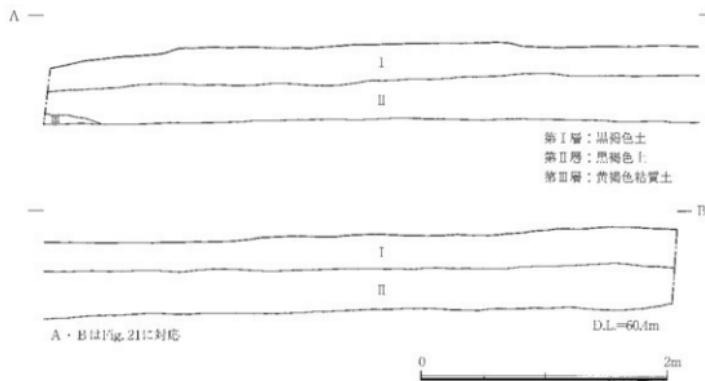


Fig. 22 第2次調査北壁土層断面図 (S : 1/40)

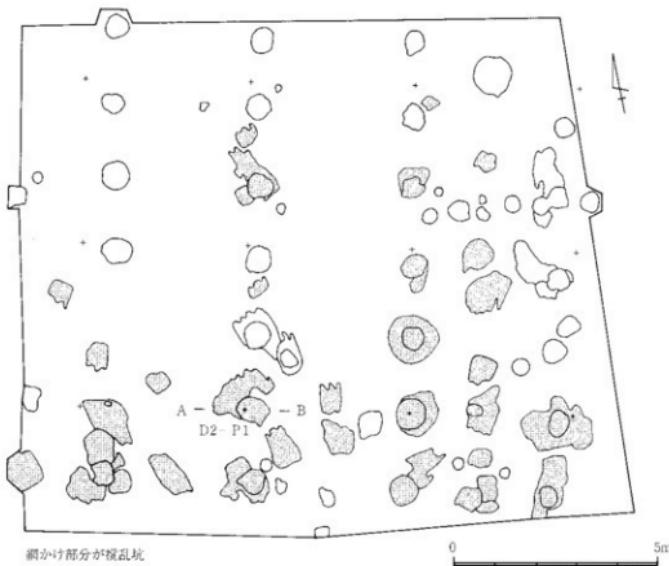


Fig. 23 第2次調査搅乱状況図 (S : 1/120)

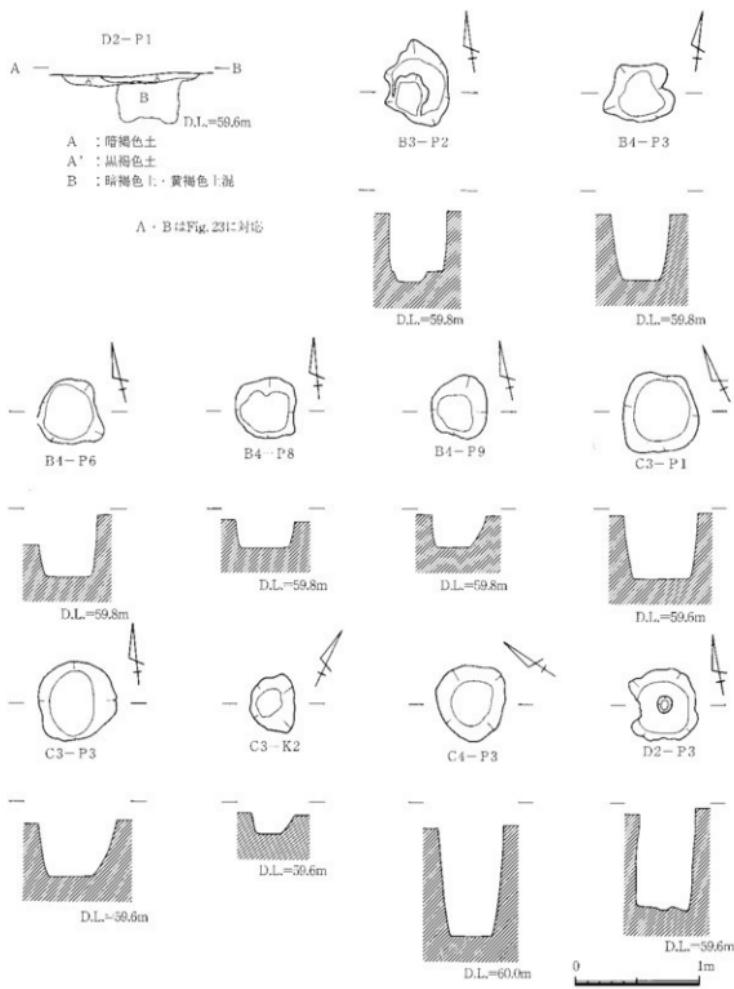


Fig. 24 第2次調査検出遺構 (S : 1/40)

(1) ピット状遺構

B 4-P 8 (Fig. 24)

平面形は隅丸四角形で、長径48cm、短径48cm、検出面からの深さは23.7cmである。埋土は黒褐色

遺物名	平面形	長径×短径(m)	検出面高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	出土遺物	年代
A 2 - P 1	不整円形	0.58 × 0.53	59.483	59.033	0.450	陶器, 磁器, 瓦	近世~
A 3 - P 1	楕円形	0.61 × 0.51	59.518	58.991	0.524	土師質土器, 瓦	近世~
A 4 - P 1	不整楕円形	0.52 × 0.46	59.598	59.151	0.447	土師質土器	中世~
B 2 - P 1	不整楕円形	0.55 × 0.48	59.473	58.914	0.559	須恵器, 瓦器	中世~
B 2 - P 2	不整円形	0.71 × 0.65	59.433	58.944	0.509	丸	近世~
B 2 - P 3	円形	0.61 × 0.57	59.536	59.028	0.504	土師質土器, 瓦	近世~
B 3 - P 1	不整形	0.59 × 0.57	59.566	58.991	0.575	陶器, 磁器, 金屬部品	近世~
B 3 - P 2	不整形	0.72 × 0.52	59.628	59.050	0.578	瓦器, 瓦, 刻片, 破片	近世~
B 4 - P 3	不整形	0.57 × 0.46	59.663	59.069	0.594	土師質土器, 陶器, 刻片, 破片	近世~
B 4 - P 6	不整形	0.58 × 0.56	59.764	59.245	0.519	—	—
B 4 - P 7	不整円形	0.50 × 0.48	59.715	59.290	0.425	磁器	近世~
C 2 - P 1	不整楕円形	0.74 × 0.64	59.467	58.977	0.490	—	—
C 3 - P 1	不整楕円形	0.62 × 0.59	59.556	59.020	0.536	織文土器, 陶器, 磁器	近世~
C 3 - P 2	楕円形	0.67 × 0.54	59.677	59.128	0.549	土師質土器	中世~?
C 3 - P 3	不整円形	0.64 × 0.63	59.541	58.988	0.553	瓦器, 陶器, 磁器, 瓦	近世~
C 4 - P 2	不整形	0.58 × 0.56	59.779	59.218	0.561	土師質土器, 陶器, 磁器, 瓦片	近世~
C 4 - P 3	不整円形	0.62 × 0.56	59.807	58.912	0.891	土師質土器, 陶器, 磁器	近世~
C 4 - P 5	楕円形	0.56 × 0.51	59.595	58.950	0.645	瓦器?, 陶器, 磁器	近世~
C 4 - P 6	円形	0.75 × 0.69	59.645	58.929	0.716	弦生土器, 陶器, 瓦, 破片	近世~
D 2 - P 1	不整楕円形	0.71 × 0.61	59.536	58.845	0.691	瓦	近世~
D 2 - P 2	不整形	0.70 × 0.62	59.563	58.855	0.708	磁器	近世~
D 2 - P 3	不整形	0.63 × 0.62	59.509	58.728	0.781	土師質土器, 瓦器, 陶器, 丸, 破片	近世~
D 3 - P 1	不整円形	0.72 × 0.66	59.684	58.986	0.698	土師質土器, 陶器, 磁器	近世~
D 4 - P 1	楕円形	0.62 × 0.47	59.668	59.030	0.638	土師質土器, 瓦器, 陶器, 破片	近世~
D 4 - F 4	楕円形	0.53 × 0.42	59.696	59.110	0.586	—	—

表3 第2次調査ピット状遺構群計測表

土である。遺物は土師質土器, 青磁?片が出土しており, 土師質土器1点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

B 4 - P 9 (Fig. 24)

平面形は不整形で, 長径50cm, 短径46cm, 検出面からの深さは27.6cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器等が出土しており, 土師質土器3点を図示した。遺構は中世の所産と考えられる。

C 3 - K 2 (Fig. 24)

平面形は不整形で, 長径46cm, 短径36cm, 検出面からの深さは18.7cmである。埋土は暗灰色土である。遺物は瓦器, 土鍤, 石器碎片等が出土しており, 土鍤1点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

(2) ピット状遺構群 (Fig. 24・表3)

本次調査においては, 東西約4m, 南北約2mの間隔で規則的な配列をなすピット状遺構25基を検出した。出土遺物を図示した7基はFig. 24に示し, 計測値等については表3にまとめた。表3によれば, 長径は52~75cm, 短径は42~69cm, 深さは42.5~89.5cmの範囲内にある。深さは検出面高の制約を受けるためにややまとまりを欠くが, 平面規模には一定の規格性のあることが理解できる。遺構から柱等の木質が出土したものはないが, 柱状に二段の掘り込みをもつものが少數みられることから, 柱状のものを埋置していたものと推察される。

これらのピット状遺構の埋没時期には, 中世まで遡れるもの(3基), 近世以降のもの(19基),

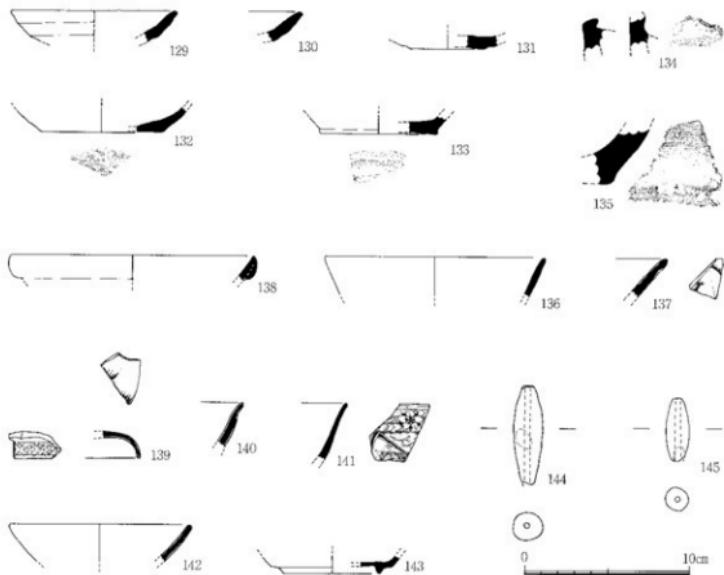


Fig. 25 第2次調査出土遺物1（土器・陶磁器・土製品）

出土遺物がなく年代不明のもの（3基）の3者が存在する。総じて出土遺物の量が少ないこと、また近世以降の年代を示すものが大勢を占めることから、総体としてのピット状遺構群は近世以降の所産と考えられる。ただし、明らかに近現代とみられる金属片の出土したB 3-P 1のような例もあり、近世以降どの時期かは確定しかねるが、極端に新しい年代が与えられる可能性のあることも想定しておく必要がある。

なお、この種のピット状遺構群は、後述の第3次調査においても検出しており、本次調査区から北方にも展開することが確認されている。

3. 遺物

(1) 土器・陶磁器・土製品 (Fig. 25)

土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、磁器、土錘、合計17点を図示した。

129～134は土師質土器である。129～131はB 4-P 9出土である。134は火鉢か。135は瓦質土器？である。136・137は青磁・碗で、136は龍泉窯系I類一？、137は龍泉窯系I類一5に分類される。⁽¹⁾ 138は白磁・碗で、口縁部は玉縁状をなし、白磁IV類に分類される。⁽²⁾ 139～143は磁器である。139は蓋である。141は印刷手法による絵付けで、版きずがみられる。144・145は土錘で

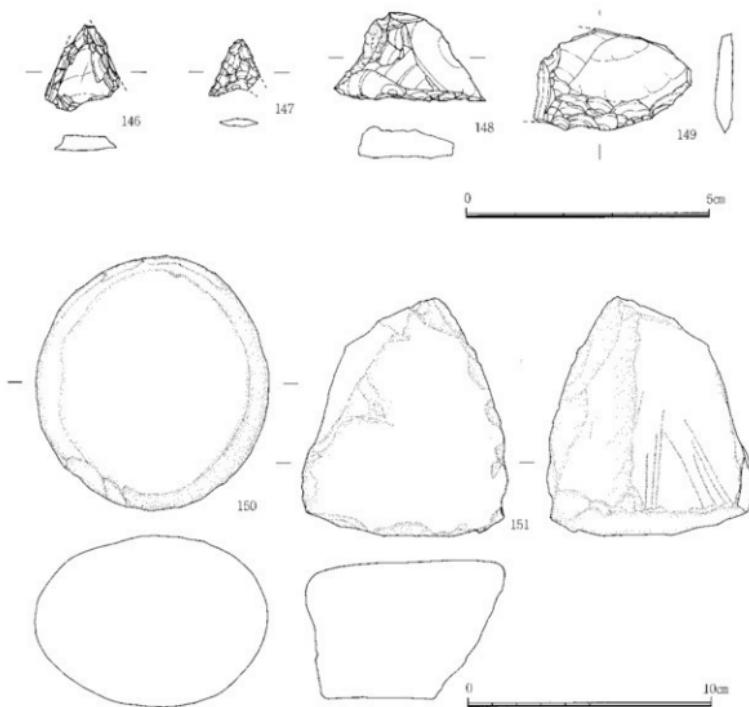


Fig. 26 第2次調査出土遺物2（石器）

ある。

(2) 石器・石製品 (Fig. 26)

石鎚、2次加工ある剥片、叩石、砥石、合計6点を図示した。

146・147は石鎚で、B 4—P 3出土。146はチャート製、147はサムカイト製である。148・149は2次加工ある剥片である。148はチャート製、149は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。150は花崗岩製の叩石である。151は砂岩製の砥石である。

註

(1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978年（『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集追悼論文集—』森田勉氏遺稿集追悼集刊行会 1995年 所収）

(2) 同註(1)

第V章 第3次調査

(1) 調査の概要

女川遺跡の範囲内で実施される町道建設に伴って、その影響を受ける埋蔵文化財の記録保存を目的として本次調査を実施した。調査期間は平成8年3月4日～3月16日、発掘調査面積は207m²であった。

(2) 調査の方法 (Fig. 27)

調査対象地が細長く、L字状に折れ曲がる形状であることと、調査中も生活道として通行を確保する目的から、全体を3つに分割して順次調査を実施した。分割した各調査区は調査の実施順

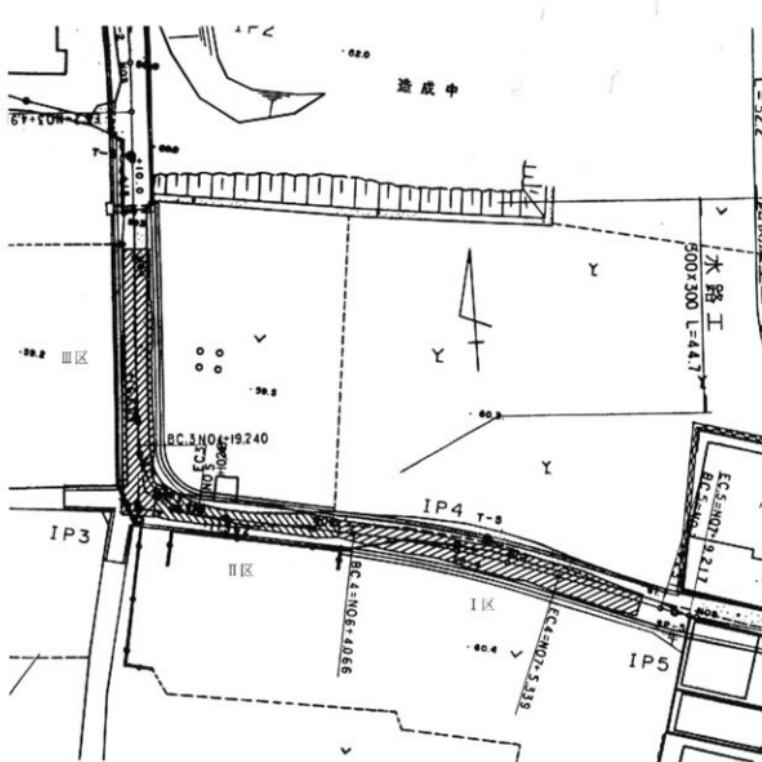
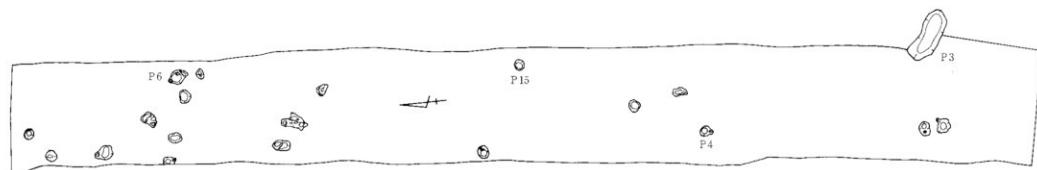
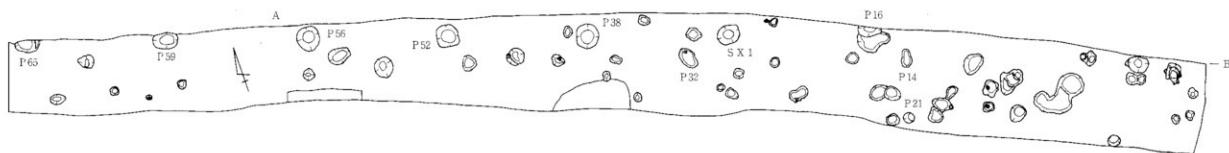


Fig. 27 第3次調査調査区配置図 (S : 1/500)



0 5m

Fig.28 第3次調査遺構全体図 (S : 1/100)

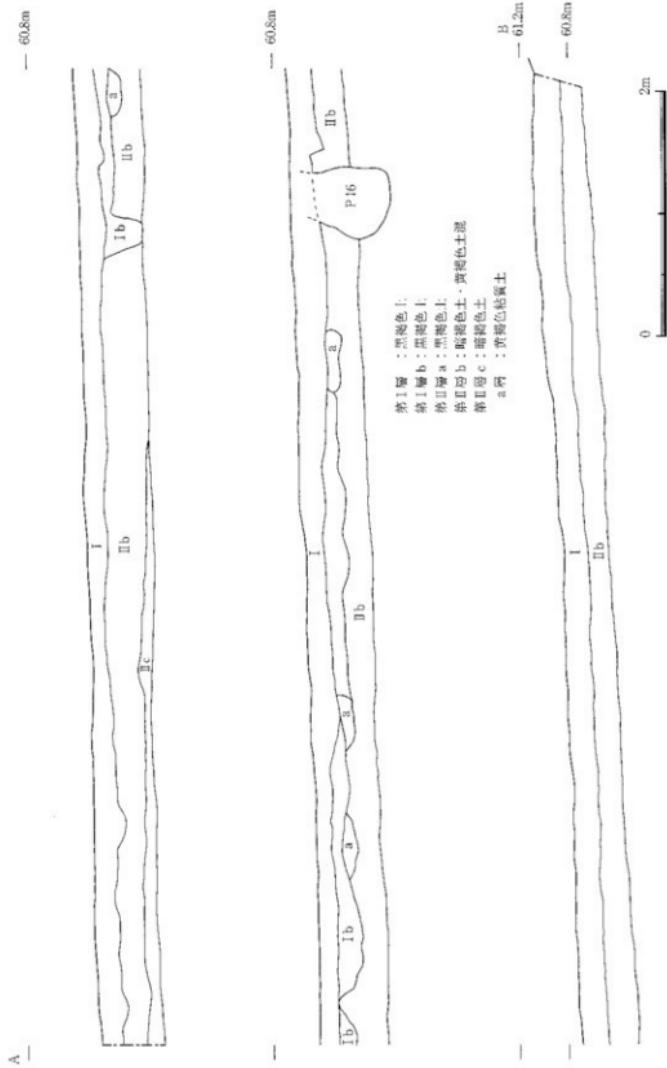


Fig. 29 第3次調查1区北壁土層断面図 (S : 1/40)

A - B 14 Fig. 28に付記

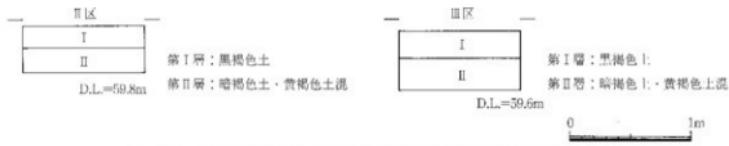


Fig. 30 第3次調査Ⅱ・Ⅲ区土層断面模式図 (S : 1/40)

に、東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とそれぞれ呼称することとした。

表土層、無遺物層の掘削は、主として重機（バックホー）を使用しておこない、遺物の含まれる層の掘り下げ、及び遺構の検出・掘り下げは人力によっておこなった。遺物を含むと考えられた層の土壤（遺構埋土を含む）は5mmのフリイによって選別し、微細な遺物の採集に努めた。遺構の検出状態・完掘状態の写真撮影を随時おこなった。完掘後は、遺構平面図・堆積土層断面図等を作成した。

(3) 調査の成果

1. 層序

(1) Ⅰ区 (Fig. 29)

Ⅰ区において確認された層序は、第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅰ層b：黒褐色土、第Ⅱ層a：黒褐色土、第Ⅱ層b：暗褐色土・黄褐色土混、第Ⅱ層c：暗褐色土、a層：黄褐色粘質土である。

第Ⅰ層は表土層を指し、その下部を第Ⅰ層bとした。第Ⅰ層b以下、第Ⅱ層と冠した層はすべて近世以降の搅乱層である。

(2) Ⅱ区 (Fig. 30)

Ⅱ区において確認された層序は、第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混である。

第Ⅰ層は表土層で、第Ⅱ層は表土層と分離される搅乱層である。Ⅱ区では、第Ⅱ層下面に刻まれた筋状の搅乱坑の末端が、調査区北壁に沿って検出された。(Fig. 31) 第1次調査TP8検出の搅乱坑は、これと同種のものと考えられる。

(3) Ⅲ区 (Fig. 30)

Ⅲ区において確認された層序は、第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混である。

第Ⅰ層は表土層で、第Ⅱ層は表土層と分離される搅乱層である。

2. 遺構 (Fig. 32~34)

Ⅰ区～Ⅲ区全体で、右列状遺構1条、土坑状遺構1基、ピット状遺構50基等を検出し、石列状遺構、土坑状遺構、ピット状遺構9基を図示した。また第2次調査区のピット状遺構群の延長とみられるピット状遺構7基の計測値等については、表4にまとめた。

(1) 石列状遺構 (Fig. 32)

II区中央部、第I～II層中で検出した。径10～60cm程度の円錐、角礫約100個で構成される。石列の方向は東半部がほぼ東西で、西半部はわずかに北に振る。上下2段程度の石の重なりはみられるが、石と石の間隙が多く、積んだような状況は顕著でない。石列の基底部は第II層中に求められるが明瞭ではなく、むしろ遺構上面の平面観を企図したものとみられる。なお、石列の最上部は消失した可能性がある。石列の下層からは、石鏃、剥片、加工礫、叩石、磨石、引き白等の縄文時代～近世の石器が出土しており、石列構築以前にこれらの集積が開始されている。遺跡内の土地利用に伴い、用途を喪失した石器・石製品が忌避される存在となり、特定の地点に集められ、これが石列へと転化したものであろうか。石列の間からは近世以降の瓦片が出土しており、形成時期は近世を過らない。遺構は「東ヤシキ」「南ヤシキ」の字境付近にあり、境界表示等を目的としたものと考えられる。

(2) 土坑状遺構

III区P3 (Fig. 33)

平面形は不整橢円形で、長径147cm、短径56cm、検出面からの深さは29.6cmである。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器、土師質土器等が出土している。遺構は中世以降の所産と考えられる。

(3) ピット状遺構

① I区P14 (Fig. 33)

平面形は楕円形で、長径43cm、短径34cm、検出面からの深さは30.3cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器、瓦器、石器剥片、碎片等が出土しており、瓦器1点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

② I区P21 (Fig. 33)

平面形は円形で、長径29cm、短径26cm、検出面からの深さは58.2cmである。埋土は暗灰色土である。遺物は土師質土器が出土しており、土師質土器1点を図示した。

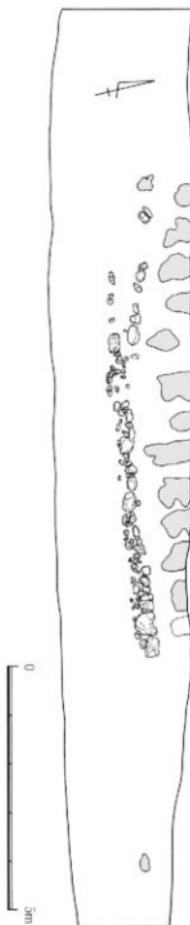


Fig. 31 第3次調査II区擾乱状況図・
石列平面図 (S : 1/100)



遺構は中世の所産と考えられる。

③ I 区 P 32 (Fig. 33)

平面形は橢円形で、長径63cm、短径38cm、検出面からの深さは11.1cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器、石器剥片、碎片等が出土しており、剥片1点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

④ III 区 P 4 (Fig. 34)

平面形は不整円形で、長径34cm、短径26cm、検出面からの深さは41.6cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は縄文土器、弥生土器、瓦片、石鎚、碎片等が出土しており、石鎚1点を図示した。遺構は近世以降の所産と考えられる。

⑤ III 区 P 6 (Fig. 34)

平面形は不整形で、長径54cm、短径36cm、検出面からの深さは25.5cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器、土師質土器、鉛玉？等が出土しており、鉛玉？1点を図示した。遺構は近世以降の所産と考えられる。

⑥ III 区 P 15 (Fig. 34)

平面形は橢円形で、長径28cm、短径26cm、検出面からの深さは26.8cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師質土器、石器碎片等が出土しており、縄文土器1点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

(4) ピット状遺構群 (Fig. 33・表4)

第2次調査区のピット状遺構群の延長とみられるピット状遺構7基を検出した。中でも I 区 P 16 は、I 区北壁の土層堆積状況 (Fig. 29) から、第 I 層中もしくは第 I 層下面から掘り込まれていることが判明した。

3. 遺物

(1) 土器・陶磁器・土製品 (Fig. 35)

縄文土器、土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、

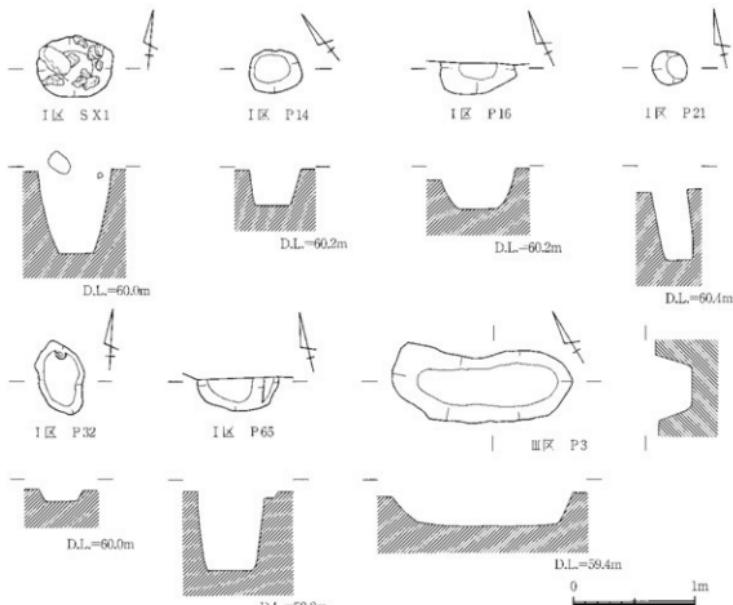


Fig. 33 第3次調査検出遺構1 (S : 1/40)

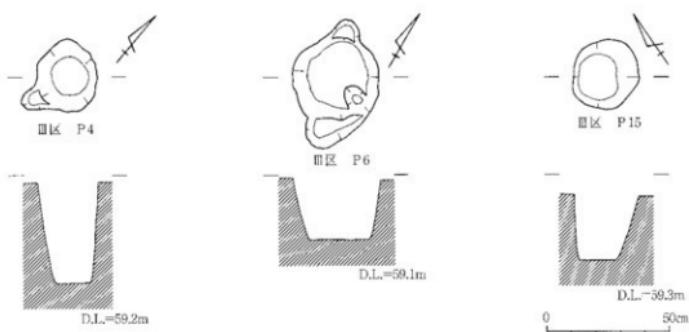


Fig. 34 第3次調査検出遺構2 (S : 1/20)

備前焼、青磁、陶器、磁器、土錘、合計35点を図示した。

152～157は縄文土器である。152は彦崎KⅡ式土器か。154・155は半城式土器である。158は土師器・高坏である。159～167は土師質土器である。163は外面にスス・タールが付着しており、灯

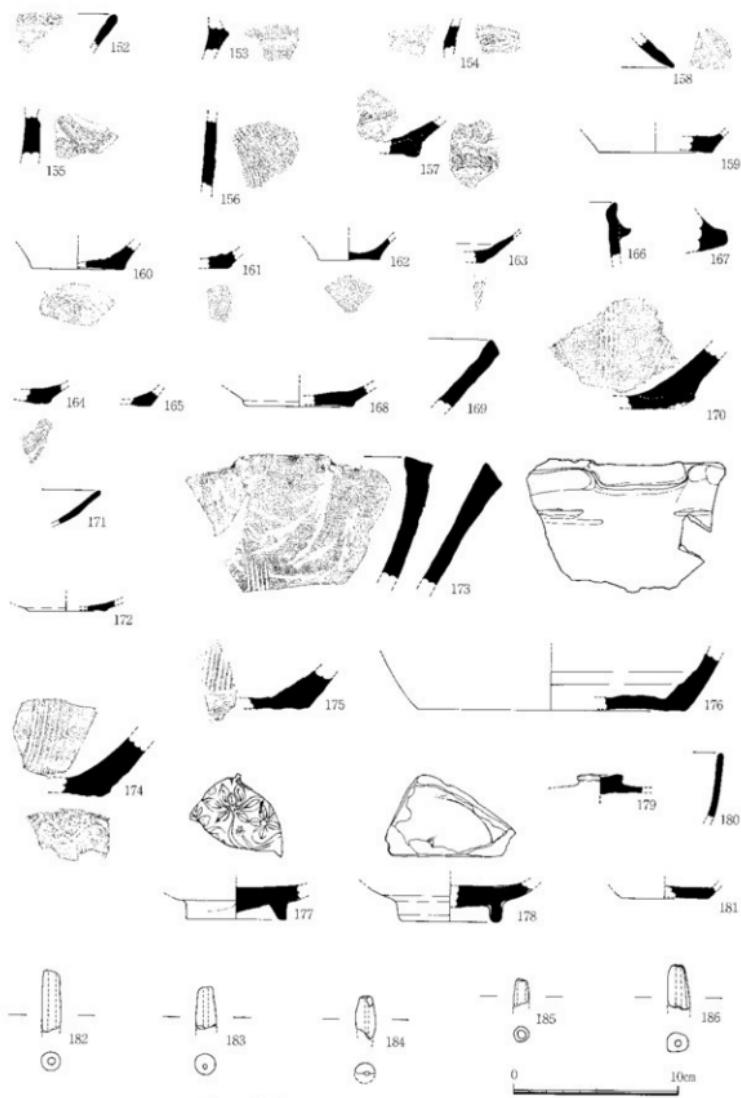


Fig. 35 第3次調査出土遺物1（土器・陶磁器・土製品）

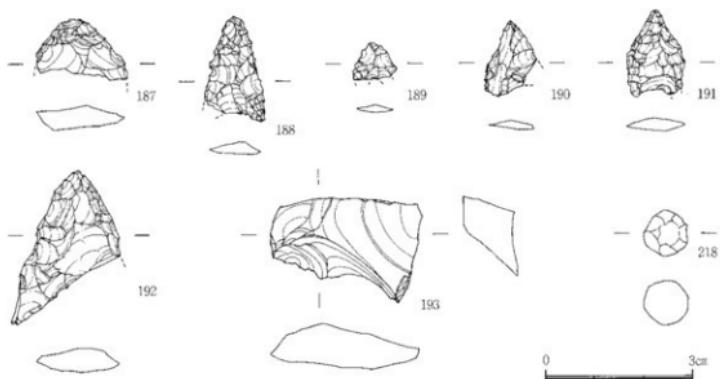


Fig. 36 第3次調査出土遺物2（石器・金属製品）

遺構名	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	出土遺物	年代
I区SX1	椭円形	0.61 × 0.49	0.689	土師質土器, 瓦器	中世～
I区P16	椭円形?	0.63 × 不明	0.328	土師質土器, 磁器	近世～
I区P38	円形	0.65 × 0.61	0.432	繩文土器, 土師質土器, 瓦器, 碎片	中世～
I区P52	隅丸方形	0.59 × 0.58	0.429	土師質土器, 瓦器, 磁器, 剥片	近世～
I区P56	不整円形	0.64 × 0.60	0.399	土師質土器, 陶器, 磁器, 瓦	近世～
I区P59	椭円形?	0.64 × 不明	0.547	繩文土器, 土師質土器, 瓦器, 碎片	中世～
I区P65	椭円形?	0.65 × 不明	0.637	土師質土器, 瓦器, 磁器, 瓦, 碎片	近世～

表4 第3次調査ピット状遺構群計測表

明瞭か。166・167は鍋である。168は須恵器である。169は東播系須恵器、こね鉢である。170は須恵器?・搗鉢で、焼成不良の非還元色を呈する。171・172は和泉型の瓦器・椀で、13世紀前半～中葉のものとみられる。⁽¹⁾173～176は備前焼である。173～175は搗鉢で、173は片口部分である。177は青磁で、見込部に細い線描きで蓮花文を施文する。179・180は陶器である。178・181は磁器で、とともに青磁釉を施釉する。182～186は土錘である。182・184・186は瓦質の焼成である。

(2) 石器・石製品 (Fig. 36~42)

石錐、剥片、石錐?、加工碟、叩石、磨石、砥石、台石、石皿、引き白、不明石製品、合計31点を図示した。

187～192は石錐である。187・188はチャート製、189～192はサスカイト製である。192は未製品か。193・194は剥片である。193はチャート製で、残核の可能性がある。194は砂岩製で、横刃形石器状の形態をなす。

195は石錐?である。196～199は性格不明の石器で、加工碟と仮称した。196・198・199は結晶

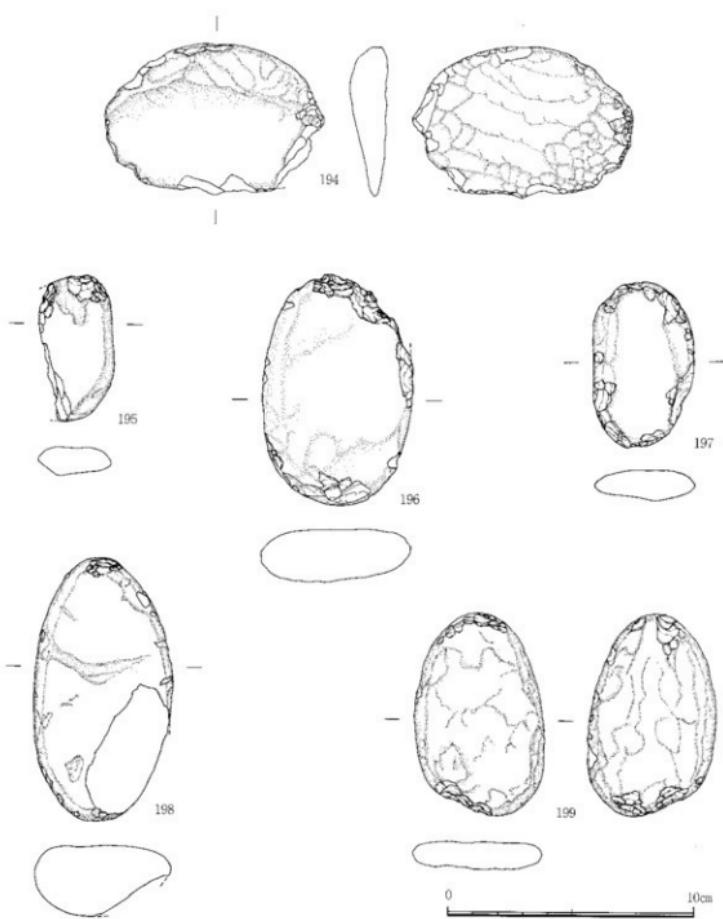


Fig. 37 第3次調査出土遺物3(石器)

片岩製、197は泥岩製である。199は石錘の可能性がある。

200~208は叩石である。200~207は結晶片岩製、208は砂岩製で、形状・材質に規格性が窺われる。209・210は磨石である。209は砂岩製、210は花崗岩製である。211は砂岩製の砥石で、4面を使用している。212・214・215は台石である。212・215は砂岩製、214は花崗岩製である。213は砂岩製の石皿である。216は砂岩製の引き臼で、使用面に4条以上単位の放射状摺目を敲打で形成す

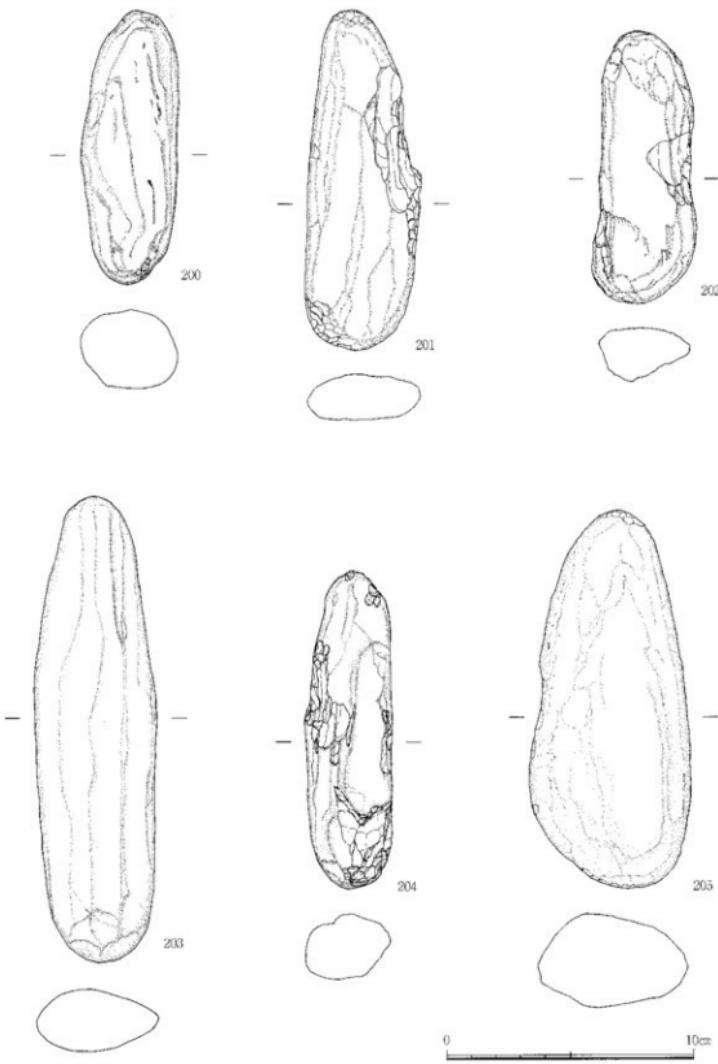


Fig. 38 第3次調査出土遺物4（石器）

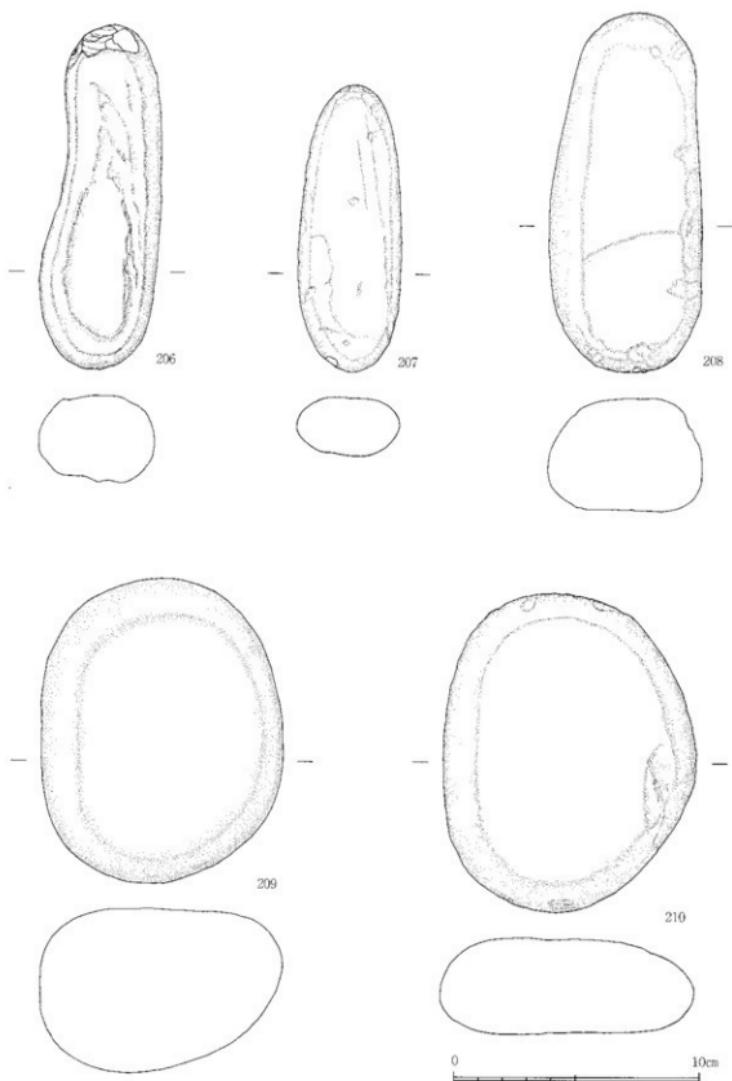
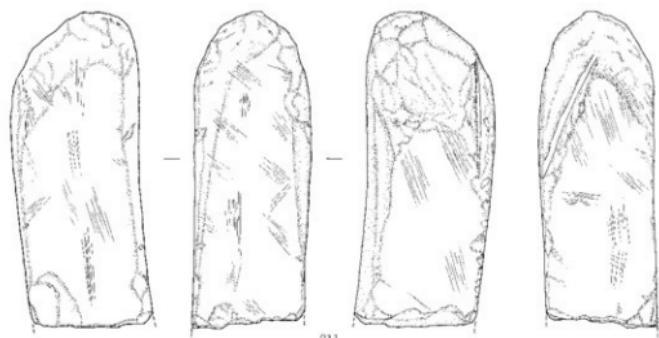
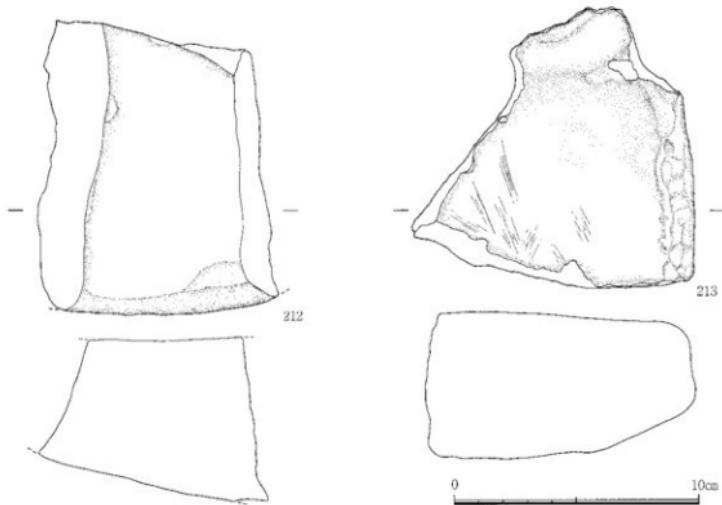
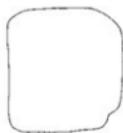


Fig. 39 第3次調査出土遺物5（石器）



211



212

213



0 10cm

Fig. 40 第3次調査出土遺物 6 (石器)

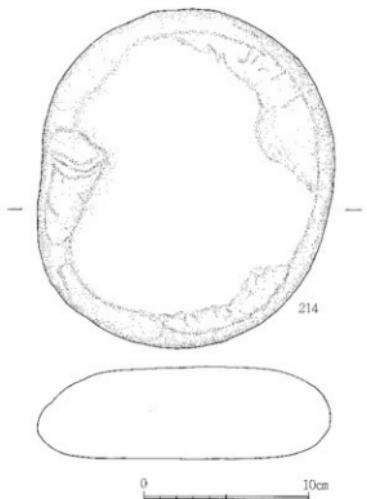


Fig. 41 第3次調査出土遺物7（石器）

る。217は円柱状石製品の半裁品で、砂岩製である。

(3) 金属製品 (Fig. 36)

218は鉛玉？である。

註

(1) 尾上光・森島康雄・近江俊秀「Ⅲ土器・陶磁器6. 瓦器枕」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年

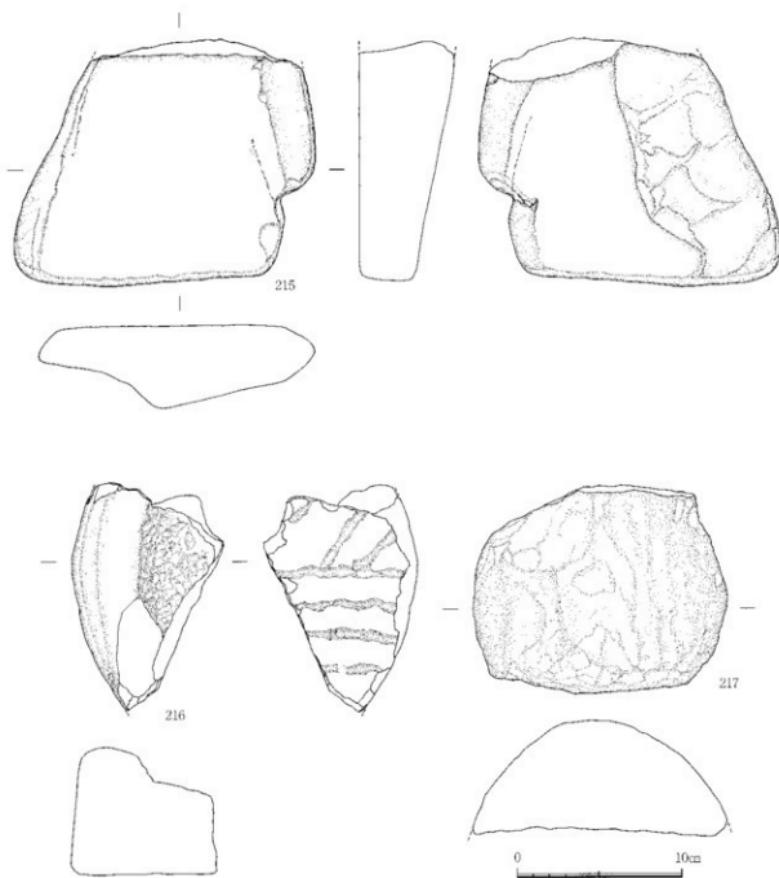


Fig. 42 第3次調査出土遺物8（石器・石製品）

第VI章 総括

(1) 第1次調査について

11箇所の試掘坑を調査し、20基余りの遺構と各時代の遺物を確認した。

遺構の中で出土遺物によって年代が特定できたのは、弥生時代前期末のTP10-SK1、中世を遡らないとみられるTP3-P1、TP4-P1(?)、TP7-P1、TP7-P2、TP7-P3、TP7-P4、TP11-P1、TP11-P2の9基である。TP10-SK1は、その出土遺物から石器製作に関わる遺構と考えられる。中世を遡らないとしたものには、近世のものも含まれる可能性が高い。一方、遺物は出土していないが、TP1-P1、TP1-P2、TP2-P1、TP2-P2、TP9-P2の5基は、中世及びそれ以前の形成によるものと考えられる。TP5～TP11の区域では、各時代の旧地表面は近接していることが想像され、その結果、遺物包含層が純粹な形では遺されなかったものとみられる。

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師質土器、瓦器、備前焼、青磁、白磁、陶磁器、土錘、ガラス製品、各種石器等が出土した。そしてその殆どはTP10からの出土であった。TP10の遺物出土量は他を圧倒しており、それはそこが遺跡の中核部に近く、また遺存状態が良好であることを示している。また、石器剥片・碎片類は、少量ながらもすべての試掘坑から出土しており、縄文・弥生時代の遺跡が調査対象地全域に遺存する可能性を示唆している。遺物から看取される遺跡の存続期間は、縄文中期、縄文後期、弥生前期、弥生後期、中世、及び近世以降である。縄文中期、弥生後期はともに遺物が少なく可能性を指摘するに留まる。縄文後期は平城式をはじめとする土器と、これに伴うとみられる石器類が出土している。弥生前期では、前期末頃の土器、凝灰質貞岩(酸性凝灰岩)・赤色チャートを素材とする多量の剥片石器類、そして半円筒状のガラス製品が出土している。凝灰質貞岩(酸性凝灰岩)は越知町横倉山産とみられ⁽¹⁾、原産地が特定できる事例として興味深い。半円筒状ガラス製品は、外觀では完形品とも破損品とも判定できず、また既存の器種名の範疇にもない、きわめて特異な形態をもつもので、国内には類例がない⁽²⁾。県内では最古のガラス製品と考えられ、今後当地域への搬入経路が問題となろう。また中世では瓦器、輸入陶磁器等が出土しており、13世紀前半以降の遺跡の存在が明らかとなった。

以上の成果から、本次の調査対象地には、全域にわたって縄文～近世の各時代の遺構・遺物が包蔵されていることが判明した。中でも縄文～弥生時代の遺跡に関しては、TP10周辺が主な分布域であり、一方中～近世の遺跡は、ほぼ全域にわたって展開していることが判明した。

(2) 第2次調査について

本次調査は、第1次調査に基づいた初の面的な発掘調査であった。第1次調査で検出していたピット状遺構のいくつかは、近世以降の所産とみられるピット状遺構群を構成するものと判明した。調査区全域に展開するピット状遺構群の性格は特定できていないが、後の第3次調査でもその一端が確認されていることから、遺跡における占有域は大きく、その位置付けは女川遺跡を理

解する上においても重要な意義をもつものと考えられる。中世の遺構は東端部で確認されており、ここから調査区外東方へ広がりをもつようである。本次の調査区は主に近世以降の遺構分布域に相当しており、今後遺構の分布から遺跡の全体像を把握していく上においては、不可欠な事實を追加することができた。

(3) 第3次調査について

本次調査は、第1次調査の「点」の成果を「線」へと昇華させたところに大きな意義を有する。その成果は、調査区周辺の未調査区域の様相に関するある程度の推測を可能にした。

I区では、東から西への地形の傾斜が認められ、標高の高い東半部側が遺構分布密度は高くなっている。それらは建物を構成する可能性があり、南北両側へ広がるものと推察される。II区は石列状遺構の存在感を除けば、遺構の少ない区域である。第2次調査のピット状遺構群の真北にありながら、それはII区には広がらず、一方I区には延びていることで、遺構群のアウトラインの一部が見えてきた。I区検出のピット状遺構群の東西列はI区P65を西限としており、その先にはII区石列状遺構がある。ピット状遺構群は、字境との関連が窺われる石列状遺構を意識している可能性があり、そのことはピット状遺構群の性格に迫る際の重要な証左となる。III区も中近世の遺構分布域であるが、検出密度はかなり散漫で、建物跡を構成するかどうかとも不明である。III区以西は、第1次調査TP11にみられるように、検出面までの深度も浅くなり、搅乱痕跡の多くなることが予想される。

以上の成果から、中近世の遺構はI区東半部付近を中心として広範囲に存在することが判明し、また縄文・弥生時代の遺物は広範囲に認められるが、遺構及び遺物の集中域については、本次調査区が「カギ形」に取り囲んだ内側（すなわち北～東）方面にその所在を絞り込むことができた。

註

(1) 石材、ならびに産出地については、安井敏夫氏（越知町企画課横倉山自然交流センター準備室）に御教示いただいた。

(2) 藤田等氏に御教示いただいた。

藤田等『弥生時代ガラスの研究 一考古学的方法一』名著出版 1994年

表5 土器・陶磁器觀察表1

番号	出土地点・層位	種類・形態	法番(文)	文様・刺繡	外観・内面	傷跡	外側	筋	裏	参考
Fig-10-1	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.80	横文式L(縦文式L), 帯状, ナメ/ナメ	にぶい傷跡 10YR 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	文様中期・精元丸?
Fig-10-2	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.00	波文式, 竹葉模印, 横文式L(縦文式L), 帯状, ナメ/ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 豊富, 黒斑, 向左 4/2	白灰, 豊富, 黑斑, 向左 4/2	白灰, 豊富, 黑斑, 向左 4/2	波文・豊富・平成式
Fig-10-3	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	3.00	波文式, 横文式L, 竹葉模印, 帯状, ナメ/ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文・豊富・城式
Fig-10-4	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.40	刺繡1 ?, ナメ/ナメ?	波文模様 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文模様・平成式
Fig-10-5	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.80	横文式L(縦文式L), 帯状, ナメ/ナメ	横文 10YR 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	白灰, 石斑, 向右 4/2	文様後期・平成式
Fig-10-6	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.70	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文・豊富
Fig-10-7	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.10	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-8	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.70	横文式L(縦文式L), 帯状, ナメ/ナメ	横文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	横文後期
Fig-10-9	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.30	ナメ(精)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	文様後期
Fig-10-10	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.80	横文式L(縦文式L), 帯状, ナメ(ミヤシの), ナメ(精)	横文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	文様後期
Fig-10-11	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.70	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-12	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.70	刺繡1 ?, ナメ/ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-13	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.30	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	白灰, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-14	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.50	波文2, 橫文2 L, ナメ/ナメ(平)	横文 10YR 4/2	白灰, 石斑, 黒斑 4/2	白灰, 石斑, 黒斑 4/2	白灰, 石斑, 黒斑 4/2	波文後期・平成式
Fig-10-15	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.60	波文式, 横文式	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期・平成式
Fig-10-16	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.00	波文2, 横文2 L, ナメ(平)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-17	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.50	波文3, 横文L, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-18	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.60	桔梗3 (直張), 滅文L, ナメ/ナメ	桔梗 10YR 4/2	白灰, 石斑 4/2	白灰, 石斑 4/2	白灰, 石斑 4/2	波文後期
Fig-10-19	第1次発掘 T10-1-5 S1	陶器・土器	陶内	1.30	横文2, 橫文L, ナメ	横文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-20	第1次発掘 T10-1-5 S1	陶器・土器	陶内	1.20	波文2, 横文L, ナメ, 波文不明	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-21	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.60	波文2, 横文2 L, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-22	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.70	波文2(印彫組み), ナメ? (ナメ(透))	波文 10YR 4/2	白灰, 石斑, 黃斑, 滅文後期・平成式	白灰, 石斑, 黃斑, 滅文後期・平成式	白灰, 石斑, 黃斑, 滅文後期・平成式	波文後期
Fig-10-23	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.20	波文2, 橫文? (ナメ?)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-24	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.50	横文2, 橫文L, ナメ, ナメ(透)	横文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-25	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.60	横文式, 横文式	横文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-26	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.70	波文2, 刺繡1 ?, ナメ?, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-27	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.20	波文1, ナメ/ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-28	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.70	波文3, ナメ?, 波文不明	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-29	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.30	ナメ(丁字) / 波文3, ナメ(丁字)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-30	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.00	ナメ(丁字), 波文2 ?, ナメ?, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-31	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.50	波文2, ナメ(透)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-32	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	4.60	ナメ(透) / ナメ(丁字)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期
Fig-10-33	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.30	ナメ(透), 波文2, ナメ(透)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-34	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	3.00	ナメ(透), 波文2, ナメ(透)	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-35	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.10	波文2, 刺繡1 ?, ナメ?, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-36	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	2.80	波文1 ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-10-37	第1次発掘 T10-1-5 K1	陶器・土器	陶内	1.80	ナメ, 刺繡1 ?, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-1	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.20	ナメ, 波文2, 橫文2 L, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-2	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	4.70	波文2(透), ナメ?, ナメ?	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-3	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.50	波文2 ?, ナメ/ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-4	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	3.10	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-5	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	5.80	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-6	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.00	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-7	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	7.60	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-8	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	1.50	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-9	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	8.40	ナメ	波文 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?
Fig-11-10	第1次発掘 T10-1, Ⅲ層 口/頭部	陶器・土器	陶内	2.30	ナメ(透) / ナメ(透)	ナメ 10YR 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	白灰, 黄斑, 向左 4/2	波文後期?

表 6 土器・陶磁器觀察表 2

表 7 主器・陶磁器觀察表 3

標本番号	出土地点・層位	群集／生態	法面 (cm, g)・大伴・深型	外観・内質	色調	判別	松土	備考
Fig.-33-164	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	1.20	葉状アリ・枯葉・死木	褐色	10YR 5/4	6/3	茎葉系由来、ロクヤウ ササ
Fig.-33-165	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	0.90	風化、不明	褐色	10YR 5/4	7/4	ロクヤウ近縁 中質
Fig.-33-166	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	3.60	角、テラ・チテ	褐色	5YR 4/2	4/2	灰石、石灰 中質
Fig.-33-167	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	2.30	チテ	褐色	5YR 4/2	6/4	中質
Fig.-33-168	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	1.20	葉状アリ・ナメ	褐色	5YR 4/2	6/4	中質
Fig.-33-169	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	6.50	葉状アリ	褐色	5YR 4/2	5/3	ナガヨシ 中質、落葉系
Fig.-33-170	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	4.20	葉状アリ	褐色	7.5YR 5/4	5/3	ナガヨシ不育で落葉化地 中質
Fig.-33-171	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	3.70	チテ・チタ	褐色	5YR 4/2	5/3	中質不育地 中質
Fig.-33-172	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	2.10	チテ	褐色	5YR 4/2	5/3	中質
Fig.-33-173	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	0.60	-葉存、少所	褐色	5YR 4/2	6/3	中質型
Fig.-33-174	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	4.70	葉状アリ・葉状根・枯葉・枯枝	褐色	5YR 4/2	5/3	ナガヨシ、ロクヤウ ササ
Fig.-33-175	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	2.50	凹形チテ・ハナチテ・チテ	褐色	10YR 3/3	3/3	白矢藤 中質
Fig.-33-176	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	3.60	凹形チテ・ナメ・チテ	褐色	7.5YR 4/2	4/2	ロクヤウ 中質
Fig.-33-177	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	2.00	ナメ・チテ・植物付・2.1cm厚付	褐色	7.5YR 4/2	4/2	中質
Fig.-33-178	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	2.50	ナメ・チテ	褐色	5YR 4/2	5/3	白色砂砾 中質
Fig.-33-179	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	0.60	ナメ・チテ	褐色	10YR 3/3	6/3	中質
Fig.-33-180	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	1.20	ナメ・チテ	褐色	7.5YR 4/2	3/4	ロクヤウ 中質
Fig.-33-181	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	5.30	ナメ・チテ	褐色	2.5YR 7/2	7/2	ナガヨシ地 落葉化地
Fig.-33-182	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	0.80	葉状アリ・死木・根付付・根付地	褐色	7.5YR 4/2	6/3	内・外輪葉型 高さ内輪葉の地 - ベ 外輪葉地、内輪葉地
Fig.-33-183	新井第3回目 区段II・Ⅲ段 上部土壌	残存	5.30	ナメ・チテ	褐色	7.5YR 4/2	7/2	内・外輪葉型 落葉化地

表 9 土錘知歌表

標題番号	出牛地点・留位	重量 (cm. g.)			文様・摘要 外観・内観	色調	備考
		全长	全幅	孔径			
Fig.11-62	第1次調査 T P 7 - I, II 番	1.90	1.30	1.40	4.60	ナゲー/—	灰質 2.5Y 7/2
Fig.11-63	第1次調査 T P 3 - I, II 番	1.60	1.50	1.20	0.50	ナゲー/—	に赤い黄 2.5Y 6/3
Fig.11-64	第1次調査 T P 2 - I, II 番	1.20	1.20	0.90	0.20	ナゲー/—	褐黃質 2.5Y 5/2
Fig.25-144	第2次調査 C 3 - P 3	6.00	1.80	1.70	0.49	ナゲー/—	灰 5Y 4/1
Fig.25-145	第2次調査 C 3 - K 2	3.90	1.50	1.45	3.50	ナゲー/腹斑縮毛压痕	灰黃 2.5Y 6/2
Fig.25-182	第3次調査 I 区 - P 14	3.80	1.20	1.10	0.50	ナゲー (カギの) /腹斑縮毛压痕	風呂場 10YR 3/2
Fig.25-183	第3次調査 I 区 - II 番	2.60	1.20	1.20	0.30	ナゲー (カギの) /腹斑縮毛压痕	に赤い黄 2.5Y 6/3
Fig.25-184	第3次調査 I 区 - P 65	2.60	1.20	0.70	0.20	ナゲー (カギの) /腹斑縮毛压痕	暗灰 N 3/
Fig.25-185	第3次調査 I 区 - II 番	1.70	1.00	0.90	0.50	ナゲー (カギの) /腹斑縮毛压痕	に赤い黄 10YR 6/3
Fig.25-186	第3次調査 I 区 - II 番	2.70	1.40	1.20	0.40	ナゲー, 背斑間に赤い斑紋/腹斑縮毛压痕	外側黒赤付青質, 青灰 内側青赤者, 青灰

表9 石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表1

神話番号	出土地名・発掘	器種	寸法(cm, g)	算 算			石材・材質	備 考
				全長	全幅	全厚		
Fig.12-65	第1次調査 T P 7 - I, II層	石錐	1.70	1.30	0.25	0.40	石基 表面：素材広い 裏面：左側は欠損で製作断面を？ 尖端部は、黄色一基部底盤先行	チャート 穂文時代
Fig.12-66	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	1.75	1.15	0.15	0.30	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-67	第1次調査 T P 4 - III層	石錐	1.65	0.85	0.30	0.30	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-68	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	0.95	1.20	0.25	0.20	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-69	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.80	1.15	0.25	0.50	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-70	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.40	0.80	0.20	0.40	石基 が逆剥離のみ残存 裏面無なし	チャート 穂文時代
Fig.12-71	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.20	1.10	0.25	0.30	尖端一端の面に横筋彫刻 裏面無なし	チャート 穂文時代
Fig.12-72	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.50	1.30	0.30	0.50	裏面無なし	チャート 穂文時代
Fig.12-73	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.65	1.10	0.30	0.50	尖端	チャート 穂文時代
Fig.12-74	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.55	1.20	0.25	0.30	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-75	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.75	1.15	0.20	0.30	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-76	第1次調査 T P 4 - III層	石錐	1.20	1.00	0.25	0.30	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-77	第1次調査 T P 2 - I, II層	石錐	1.80	1.10	0.33	0.60	門基 表面無し 実測範囲？ 尖端等のみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-78	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	0.75	0.90	0.20	0.10	尖端等のみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-79	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.10	1.00	0.20	0.20	石基 表面：素材広い	チャート 穂文時代
Fig.12-80	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	0.85	1.10	0.20	0.20	尖端	チャート 穂文時代
Fig.12-81	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.60	1.20	0.20	0.30	尖端等ののみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-82	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.00	1.23	0.20	0.30	尖端等ののみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-83	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	2.40	1.45	0.30	1.00	尖端等ののみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-84	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.00	0.85	0.15	0.40	尖端等ののみ残存	チャート 穂文時代
Fig.12-85	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	3.00	1.45	0.50	1.70	尖端等ののみ残存 鋸切削端部等 拾回片口に儲る	チャート 穂文時代
Fig.12-86	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	2.25	1.90	0.50	2.30	平基	原石質質石質
Fig.12-87	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	1.95	1.60	0.35	1.10	扁平平素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.12-88	第1次調査 T P 6 - I, II層	石錐	2.00	1.70	0.20	0.90	扁平平素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.12-89	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	2.50	1.75	0.30	1.00	扁平平素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.12-90	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	2.80	2.25	0.35	2.00	尖端等ののみ残存 扁平平素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.12-91	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	1.95	2.30	0.40	1.80	石基	原生時代
Fig.12-92	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	2.80	2.30	0.60	1.90	原生質質石質	原生時代
Fig.13-03	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	1.55	0.70	0.30	0.30	複長削片素材 背面の棱を利用	チャート 半生時代
Fig.13-04	第1次調査 T P 10 - S K 1	尖頭錐	4.20	2.30	0.65	7.50	複長削片素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.13-05	第1次調査 T P 10 - II層	尖頭錐	2.80	2.75	0.40	5.30	複長削片素材、周縁彫刻	半生時代
Fig.13-06	第1次調査 T P 10 - S K 1	スクレーパー	2.25	3.20	0.70	2.70	石基？	半生時代
Fig.13-07	第1次調査 T P 10 - I, II層	スクレーパー	3.25	3.90	0.55	9.80	左側面：複長削片 長削片片材	半生時代
Fig.13-08	第1次調査 T P 10 - I, II層	スクレーパー	3.25	3.75	0.55	7.60	長削片片材	半生時代
Fig.13-09	第1次調査 T P 10 - II層	スクレーパー	4.65	2.90	0.65	10.10	複長削片素材、周縁彫刻？ 穴頭跡？	半生時代
Fig.14-100	第1次調査 T P 11 - I, II層	R F	1.45	1.60	0.25	0.70	複長削片 穴頭？	半生時代
Fig.14-101	第1次調査 T P 10 - S K 1	R F	3.00	1.00	0.50	1.80	複長削片 穴頭？ スケルバ？	半生時代
Fig.14-102	第1次調査 T P 8 - I, II層	R F	2.20	0.65	0.25	0.70	左側面：複長削片 右側面：複長削片	半生時代
Fig.14-103	第1次調査 T P 10 - I, II層	R F	2.35	1.15	0.33	0.80	右側面：複長削片	半生時代
Fig.14-104	第1次調査 T P 10 - S K 1	R F	1.80	1.80	0.20	0.70	右側面：複長削片	半生時代
Fig.14-105	第1次調査 T P 10 - I, II層	R F	0.90	1.20	0.25	0.40	右側面：複長削片	半生時代
Fig.14-106	第1次調査 T P 10 - S K 1	R F	2.50	1.00	0.20	0.60	右側面：複長削片	半生時代
Fig.14-107	第1次調査 T P 10 - S K 1	R F	2.30	1.40	0.30	1.30	左側面：複長削片	半生時代
Fig.14-108	第1次調査 T P 10 - S K 1	R F	2.10	1.05	0.25	0.60	左側面：複長削片	半生時代
Fig.14-109	第1次調査 T P 10 - I, II層	R F	2.60	2.70	1.00	8.90	下端に複数 制作品？	チャート 半生時代
Fig.14-110	第1次調査 T P 4 - III層	剥片	3.55	1.60	0.90	6.30	左側面：複数？	半生時代
Fig.14-111	第1次調査 T P 11 - I層	剥片？石核？	6.85	4.75	1.55	13.10	左側面：打凹面？ 石核？	チャート 半生時代
Fig.15-112	第1次調査 T P 10 - S K 1	石核	5.40	3.80	1.45	27.40	左側面：打凹面？ 穴頭？	チャート 半生時代
Fig.15-113	第1次調査 T P 10 - S K 1	石核	3.60	4.25	2.40	33.20	左側面：打凹面？ 穴頭？	チャート 半生時代
Fig.15-114	第1次調査 T P 10 - S K 1	石核	9.15	4.90	1.90	120.20	左側面：打凹面？ 穴頭？	チャート 半生時代
Fig.16-115	第1次調査 奥庭	石錐	7.20	3.10	1.60	43.70	腹面下端：石核利用時の剝離 巻軸向削除欠	泥質
Fig.16-116	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	6.60	4.60	2.15	90.80	泥質	泥質時代？
Fig.16-117	第1次調査 T P 10 - S K 1	石錐	8.60	6.60	1.60	157.60	泥質	泥質時代？
Fig.16-118	第1次調査 T P 10 - I, II層	石錐	8.90	4.55	2.30	163.50	泥質	泥質時代？
Fig.17-119	第1次調査 T P 11 - I層	印石？	9.20	3.25	1.50	66.90	底部に使用區 巻軸向削除による底盤	泥質
Fig.17-120	第1次調査 奥庭	碧玉	10.90	9.90	4.35	66.00	底部に使用區 巻軸向削除による底盤	泥質
Fig.17-121	第1次調査 T P 2 - I層	印石	13.60	7.00	3.00	491.00	底部に使用區 巻軸向削除による底盤	泥質

表10 石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表2

標団番号	出土地点・層位	器種	寸法 (cm, g)				調査等	石材・材質	備考
			全長	全幅	全厚	重量			
Fig.17-122	第1次調査 表深	叩石	11.20	8.20	4.35	550.00	光亮 周辺部に使用痕 表面面やや凹凸有 表面：敲打により彎曲	砂岩	年代？
Fig.18-123	第1次調査 T P10 - S K 1	叩石	12.80	11.50	4.60	935.00	表面：敲打により彎曲	砂岩	弥生時代？
Fig.18-124	第1次調査 T P10 - II 層	白石	16.90	13.00	7.10	2230.00	表面：敲打により彎曲	砂岩	弥生時代？
Fig.19-125	第1次調査 T P 3 - 卵面	不明打製品	2.20	1.00	0.70	2.00	円柱状 半球状 表面：敲打により彎曲	砂岩	年代？
Fig.19-126	第1次調査 T P10 - S K 1	半円削状 ガラス製品	1.40	1.60	0.90	2.30	半球状 表面：敲打により彎曲	カリガラス	弥生時代
Fig.19-127	第1次調査 T P 5 - I, II 層	鍛貨	2.30	2.00	0.30	1.60	表面：上端部不規則、バリ形？ 表面：無地。2カ所に鉄錆付着 裏面：錆斑、表面削除、赤銹	鐵	近世？
Fig.19-128	第1次調査 T P 10 - I, II 層	鉈平？	0.90	0.95	0.90	3.60	表面：無地。	鉈	年代？
Fig.26-146	第2次調査 D 4 - P 3	石器	1.75	1.55	0.50	0.80	表面削除、片面削整	サマタイト	弥生時代？
Fig.26-147	第2次調査 D 4 - P 3	石器	1.15	1.05	0.45	0.10	表面削除	サマタイト	弥生時代
Fig.26-148	第2次調査 D 4 - P 3	R F	2.85	3.10	6.00	3.90	左側面：表面削除あり 裏面：刃部付近多	サマタイト	弥生時代
Fig.26-149	第2次調査 B 3 - P 2	R F	3.15	2.45	0.40	3.40	未確認品？	次灰質陶器	出生時代？
Fig.26-150	第2次調査 D 2 - P 3	磨石	10.40	9.60	7.00	960.00	表面：磨拭 裏面：磨拭	花崗岩	年代？
Fig.26-151	第2次調査 四脚炉、表深	結石	9.75	8.45	5.70	3930.00	表面：滑溜、底面 裏面：滑溜、底面	砂岩	年代？
Fig.26-187	第3次調査 II 区 - II 層	石器？	1.20	1.80	0.50	1.00	表面：素材面広い	チャート	縄文時代？
Fig.26-188	第3次調査 II 区 - II 層	石器	2.15	1.25	0.25	0.60	表面：素材面広い	チャート	縄文時代？
Fig.26-189	第3次調査 I 区 - II 層	石器？	0.90	0.80	0.15	0.10	凹凸：主に片面削整	サマタイト	縄文時代
Fig.26-190	第3次調査 III 区 - P 4	石器	1.40	1.10	0.20	0.20	表面：素材面広い	サマタイト	出生時代？
Fig.26-191	第3次調査 I 区 - II 層	石器	1.75	1.20	0.25	0.50	凹凸：主に片面削整	サマタイト	縄文時代？
Fig.26-192	第3次調査 II 区 - 右列下層	右脚	3.15	2.20	0.50	2.60	未確認品？	サマタイト	縄文時代？
Fig.26-193	第3次調査 I 区 - P 32	剥片	2.15	3.15	0.95	5.30	残片	サマタイト	縄文時代？
Fig.27-194	第3次調査 B 区 - 右列下層	剥片	6.20	8.90	1.55	106.70	表面：纏皮面 下側：使用痕 横孔：石器？	砂岩	年代？
Fig.27-195	第3次調査 II 区 - 右列下層	石器？	6.00	3.10	1.15	33.20	- 滑部打欠 表面：不明	泥岩	年代？
Fig.27-196	第3次調査 II 区 - 右列下層	加工面	9.40	6.20	2.15	190.00	表面：不明	結晶片岩	年代？
Fig.27-197	第3次調査 II 区 - 右列下層	加工面	6.80	4.15	1.30	57.20	周辺部：崩壊多い、性格不明 石器？	泥岩	年代？
Fig.27-198	第5次調査 II 区 - 右列下層	加工面	10.70	5.60	2.90	250.00	長軸開端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.27-199	第5次調査 II 区 - II 層	加工面	8.30	5.30	1.15	81.00	左側面：長軸開端；調査剥離 石器？	結晶片岩	年代？
Fig.28-200	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	11.20	4.05	3.20	259.90	左側面：長軸開端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-201	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	13.90	4.80	1.90	194.00	下側面：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-202	第5次調査 II 区 - 右列下層	叩石	11.10	4.20	2.20	141.10	右側面：右側斜：調整剥離 下側面：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-203	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	19.10	5.00	2.55	405.00	左側面：下側：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-204	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	13.00	3.60	2.70	169.80	左側面：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-205	第5次調査 II 区 - II 層	明石	15.45	6.50	3.85	556.10	左側面：長軸側部に使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.28-206	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	14.00	4.90	3.60	422.00	左側面：使用痕、上側：調整剥離	結晶片岩	年代？
Fig.28-207	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	11.65	4.15	2.40	196.50	左側面：下側：使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.28-208	第5次調査 II 区 - II 層	叩石	14.70	6.20	4.60	660.00	左側面：下側：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.28-209	第5次調査 II 区 - II 層	磨石	12.40	9.80	6.65	103.00	表面：滑溜、裏面：不整 表面：滑溜、やや凹	砂岩	年代？
Fig.28-210	第5次調査 II 区 - 右列下層	磨石	13.00	10.30	3.95	840.00	表面：滑溜、やや凹 周辺部：使用痕	化岩石	年代？
Fig.29-211	第5次調査 II 区 - II 層	研石	12.90	4.80	5.10	580.00	角柱状 4面使用 横～中斜 表面：平滑、やや凹	砂岩	年代？
Fig.29-212	第5次調査 II 区 - 右列下層	右石	11.95	9.75	6.90	1130.00	表面：滑溜	砂岩	年代？
Fig.29-213	第5次調査 II 区 - II 層	右石	11.50	11.55	6.00	580.00	表面：上下2小部分に凹部、下端部 に剥離	砂岩	年代？
Fig.41-214	第5次調査 II 区 - 右列下層	台石	20.60	17.90	5.60	320.00	右側面：敲打により整形	花崗岩	年代？
Fig.42-215	第5次調査 II 区 - II 層	台石	15.00	18.30	5.75	2060.00	表面：滑溜	砂岩	年代？
Fig.42-216	第5次調査 II 区 - II 層	引き臼	13.75	9.20	7.75	110.00	右側面：敲打による凹部整形、周 縁部剥離 使用痕：放射状剥離（4面以上）、 敲打により形成、歪つ	砂岩	上日 年代？
Fig.42-217	第5次調査 II 区 - II 層	不明石製品	12.70	15.30	7.05	1500.00	周辺部：敲打 + 剥離 表面：滑溜	砂岩	年代？
Fig.36-218	第5次調査 III 区 - P 6	和平？	0.85	0.90	0.90	3.40	表面：敲打で整形 表面：剥落	砂岩	年代？

付編 女川遺跡出土半円筒（勾玉）ガラスの分析

奈良国立文化財研究所 肥塚隆保

1.はじめに

出土する古代のガラスの種類は、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラス、そして鉛アルカリ珪酸塩ガラスに分類される。アルカリ珪酸塩ガラスはカリガラスと2種類のソーダ石灰ガラスに、鉛珪酸塩ガラスは鉛バリウムガラスと鉛ガラスに分類される。これらのガラスはいずれも弥生時代に出現していることが従来の研究で明らかにされている。なかでも、カリガラスと鉛バリウムガラスは紀元前2世紀頃には日本に伝えられていた。

今回の女川遺跡の発掘調査では半円筒状の勾玉が発見された。この遺物は青緑色を帯びた青色の半透明ガラスで、その形状は従来には見られないものであった。ここではこのガラス遺物の構造調査と材質調査を実施したので、その結果を報告する。

2.測定試料と方法

分析対象とした試料は、青緑色を帯びた青色半透明～透明を呈するガラスで、円筒を半分に切断したような形状を呈し、大きさはほぼ1.4cm（長さ）、幅はほぼ1.6cmでありその一端に直径がおよそ1.5mm程度の小さな孔が貫通している。重量はほぼ2.5gである。

調査はまず孔の状態を調べるため実体顕微鏡による表面および断面の観察とX線ラジオグラフィー（X線画像強調処理も同時に実施）による調査をおこなった。X線透過撮影にあたっては、試料の孔とフィルム面が水平になるような幾何学的配置下で撮影した。撮影条件はフィルムからX線焦点までの距離を1.5mとし、100kV、2mA、1分間の露出をおこなった。その後、アナログ画像強調処理を加えて孔の開けかたなどを観察した。

色調に関しては紫外・可視分光度計を用いて透過吸収スペクトルの測定をおこなった。

材質の調査は、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析（トレックス640S）装置を使用して、表面（風化部）と表面の一部を研磨して新鮮な面を表出して測定をおこなった。定量計算はガラス標準試料を用いて、ファンダメンタルバラメーター（FP）法により行った。なお、測定は、真空条件下で励起電圧：20～45kV、電流値：4～0.5mA、コリメータ： $1\text{ mm}\phi$ 、測定時間：2000秒とした。

3.測定結果と考察

実体顕微鏡観察の結果、ガラス表面は所謂「ツメ跡」状になっており（図-1）、ガラスの流動性が悪い段階で整形されたとも考えられ、また、ガラス内部にも多数の気泡が認められた。断面の一端に開けられた孔は写真（図-2.）に示すようにほぼ円形を呈しているが、円の一端は直線状を呈していた。この孔が金属線を利用して整形されたのであれば、その金属線は形状からするとダ

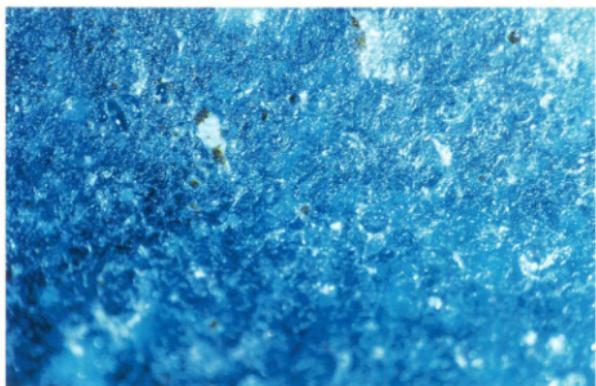


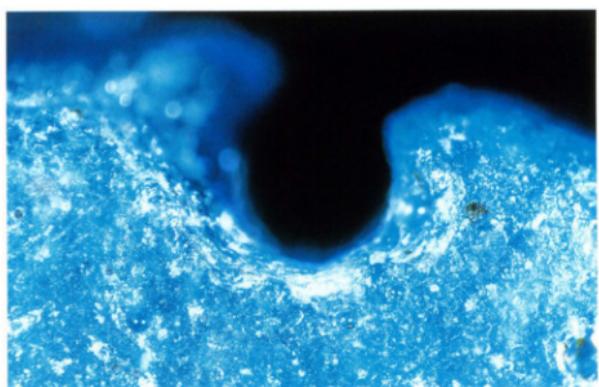
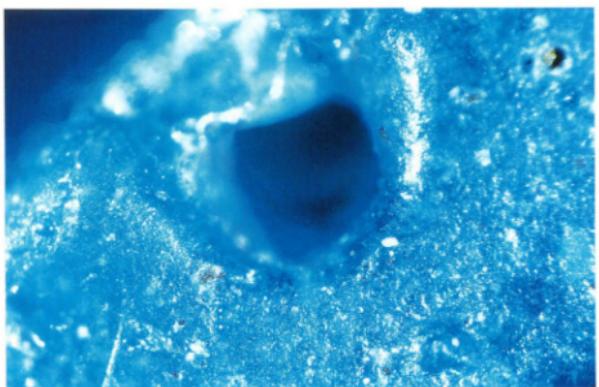
図-1. ガラス表面の観察

イスのようなもので加工されたのではなく、型に金属を入れて叩く事によって作られた針金状のものと考えられる。

X線透過撮影の結果、断面の一端に開けられた孔はストレートに貫通しており（図-3.）、その直径はほぼ 1.5 mm 前後と推定された。以上の事からこの孔は予め金属線などを鋳型に取り付けて、溶融したガラスを流し込んで作られたもので、ガラスが固化した後に錐などで孔が開けられたものでないことは明らかである。

ガラスの材質に関しては、風化表面を研磨して新鮮な部分を測定した結果、酸化カリウムと二酸化珪素を主成分とするカリガラス（K₂O SiO₂系）であることが同定できた。このカリガラスは酸化アルミニウムを数%含有し、酸化マグネシウムや酸化カルシウムは1%前後以下であり、従来から報告されている弥生時代の遺跡から出土するカリガラスと同じ組成を有することが明らかとなった。なお、測定値については表-1a,bに示した。

カリガラスは大きく分類するとアルカリ珪酸塩ガラスに分類されるもので、弥生時代には2種類のアルカリ珪酸塩ガラスが存在した。その一つがカリガラスで、他方はソーダ石灰ガラスである。日本では最も古いカリガラスは紀元前2世紀頃の遺跡から発見されており、この頃から日本で流通をはじめたと考えられる。いっぽうのソーダ石灰ガラスは、例外的なものを除けば3世紀後半頃から流通したと考えられるガラスである。今回出土したカリガラスは青色系であり、従来から弥生時代の遺跡で発見されるカリガラスのなかでも最も多い色調である。今回発見されたガラスの色調を精密に測定した結果、図-4に示すように708nmに極大の吸収を示しており、Cuイオンの青色の着色が原因している。また、少し緑を帯びて見えるのはFeイオンが影響しているもの



図一2. 両断面に見られる孔の形状

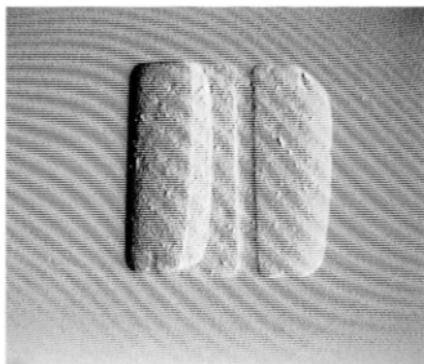


図-3. X線透過写真（画像強調処理）

と考えられる。また、従来の調査ではCuイオンの着色によるガラスにはかならずPbOやSnO₂が伴うことが明らかにされてきたが、今回の資料でも鉛、錫は検出しており、当時の日本で広く流通したカリガラスと同じ材質のガラスであることが明らかとなった。このようなカリガラスは中国では多量に出土しており、中国で作られたこれらのカリガラスは朝鮮半島を経由したり、中国から日本に直接伝えられていたのかもしれない。なお、筆者らの調査によると、カリガラスに含まれる鉛の同位体比は中国産の鉛鉱石の分布範囲に入る事を確認している。

なお、今回の資料はできるだけ資料を採集しないで調査する必要があったので、直接に物性を求める事はできなかった。しかし、珪酸塩ガラスにおいては、ガラスの組成がわかれれば加成性因子を用いて近似的に屈折率、熱膨張係数などの諸物性が計算できる。ここではアッペンによる加成性因子を用いて物性値の計算をおこなった。以下はガラスの組成を構成酸化物のモル%を求めて、以下の式により計算をおこなった。

$$P = p_1f_1 + p_2f_2 + \dots + p_if_i$$

Pは着目する性質でガラスの構成成分を $(M_xO_y)_1, (M_xO_y)_2, \dots, (M_xO_y)_i$ とし、それらの含有率を f_1, f_2, \dots, f_i とする。 p_1, p_2, \dots, p_i は構成成分 $(M_xO_y)_1, (M_xO_y)_2, \dots, (M_xO_y)_i$ の性質 P についての寄与率で加成性因子である。ただし、SiO₂、PbOなどについてはある範囲をもって与えられる。次式はの加成SiO₂成因子と含有量SiO₂の関係（アッペン）を示したものである。

$\text{SiO}_2 > 67$ の条件下

$VSiO_2 = 26.1 + 0.035 \ (\text{SiO}_2 - 67)$: モル容積 $VI \ (\text{cm}^3/\text{mol})$
$n SiO_2 = 1.475 - 0.0005 \ (\text{SiO}_2 - 67)$: 屈折率 n_i
$\alpha SiO_2 = 38 - 1.0 \ (\text{SiO}_2 - 67)$: 平均線膨張係数 $\alpha_i \ (10^{-7}/^\circ\text{C})$
$E SiO_2 = 6.6 + 0.02 \ (\text{SiO}_2 - 67)$: 縦断性率 $E_i \ (10^3 \text{kg/mm}^2)$

$\text{SiO}_2 < 67$ の場合は一定とみなす

$$VSiO_2 = 26.1, \quad n SiO_2 = 1.475, \quad \alpha SiO_2 = 38.0, \quad E SiO_2 = 6.5$$

今回の計算結果については、表-2にまとめたので参考として示しておく。これはあくまでも組成から求めた理論計算値であり、実際の密度などは介在する気泡などにより変動する。

4.まとめ

今回測定した半円筒状を呈する青色～青緑色の勾玉はカリガラスでできていることが明らかにできた。カリガラスは中国では漢代の遺跡から多量に発見されており、また、日本では弥生時代の遺跡から最も多量に出土するガラスである。カリガラス自身は日本で製造されたとは考えられず、中国で製造されたものが伝えられたと考えられる。

今回出土した遺物は從来から発見されているカリガラスと同じ組成であるが、その形状は從来から日本で発見されていないもので、すでに加工されたものが伝えられたのか、日本において加工されたのかを検討する必要もある。

なお、吸収スペクトルの測定にあたっては 京都工芸繊維大学名誉教授 佐藤昌憲先生の御協力をいただいた。

表-1a. ガラスの分析結果

	網目形成酸化物 (mol%)	網目修飾酸化物	中間酸化物
	83.5	13.8	1.2

表-1b. 蛍光X線分析法によるガラスの測定

(wt%)											
SiO ₂	Al ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	MgO	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	MnO	PbO	Rb ₂ O
76.7	2.0	0.4	16.3	0.5	1.0	0.03	0.5	1.2	0.2	tr	tr

tr: 定量限界以下を示す。

表-2. アッペンの加成性因子からもとめた物性

密度	屈折率	線膨張率(10 ⁻⁷ /℃)	綫断性率(10 ³ Kg/mm ²)
2.36	1.46	74.6	6.58

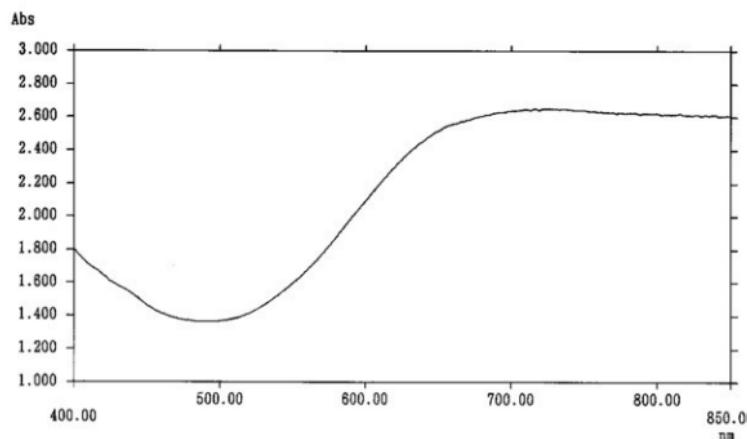


図-4. ガラスの透過吸収スペクトル図

写真図版



女川遺跡遠景（南西より）



同上（西より）



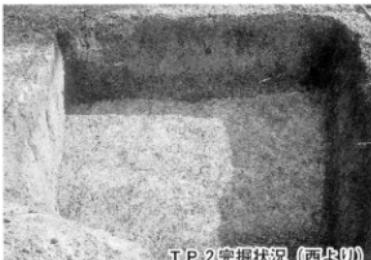
TP 1 調査前状況 (北より)



TP 1 完掘状況 (南より)



TP 2 調査前状況 (北より)



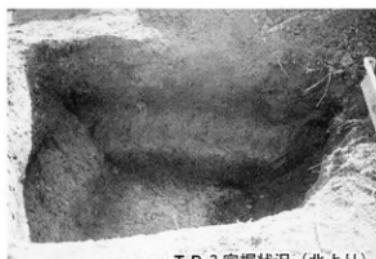
TP 2 完掘状況 (西より)



TP 3 調査前状況 (東より)



TP 3 遺構完掘状況 (北より)



TP 3 完掘状況 (北より)



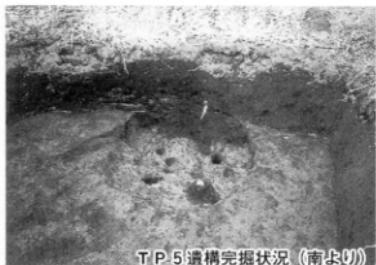
TP 4 調査前状況 (東より)



TP 4 遺構完掘状況（北より）。



TP 5 調査前状況（東より）。



TP 5 遺構完掘状況（南より）。



TP 6 調査前状況（北東より）。



TP 6 完掘状況（西より）。



TP 7 調査状況（北東より）。



TP 7 完掘状況（北より）。



TP 8 調査前状況（北より）。



TP 8 完掘状況 (北より)



TP 9 調査前状況 (南西より)



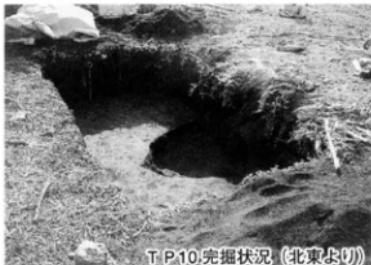
TP 9 完掘状況 (西より)



TP 10 調査前状況 (北より)



TP 10 遺物出土状況 (東より)



TP 10 完掘状況 (北東より)



TP 11 調査前状況 (北より)



TP 11 完掘状況 (西より)



第2次調査調査前状況（東より）



同上（北西より）



第2次調査遺構検出状況（東より）



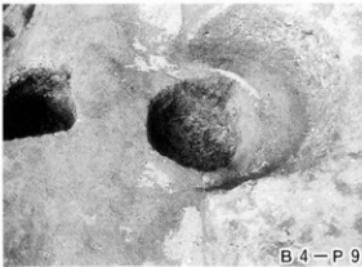
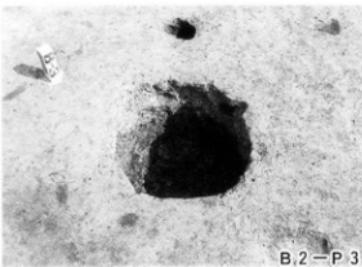
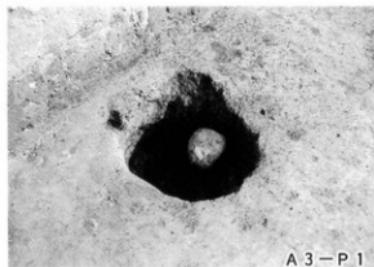
同上（東より）



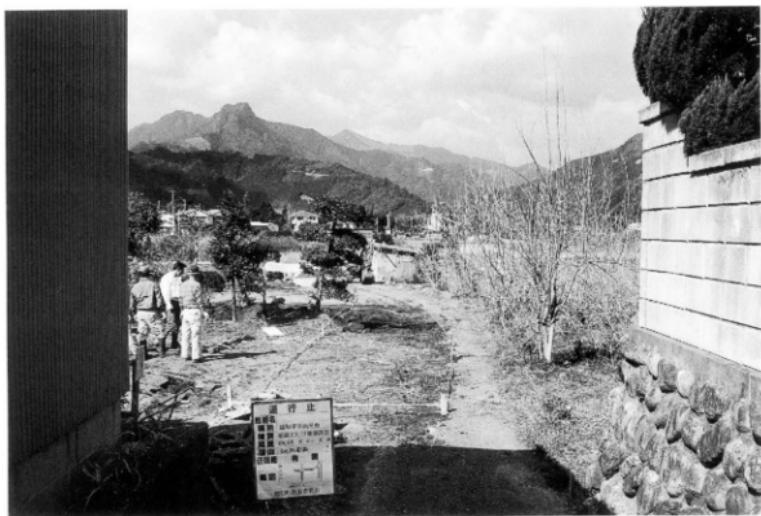
第2次調査遺構完掘状況（東より）



同上（東より）



第2次調査調査状況、検出遺構



第3次調査 I 区調査前状況（東より）



同上（西より）



第3次調査Ⅲ区調査前状況（南より）



第3次調査Ⅰ区遺構完掘状況（西より）



同左（東より）



第3次調査Ⅰ区遺構完掘状況（東より）



同左（西より）



第3次調査Ⅲ区遺構完掘状況（南より）



同左（北より）



I区遺構検出



II区遺構検出



III区西壁土層断面



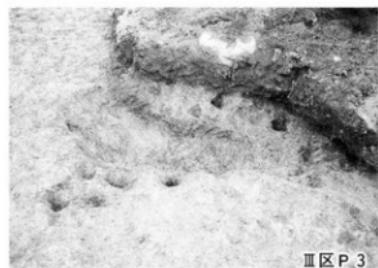
I区P 16



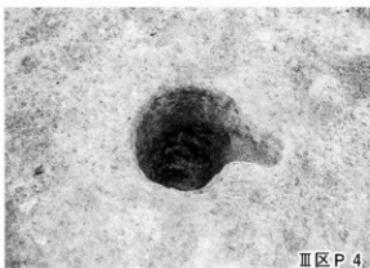
I区SX 1



II区石列状遺構

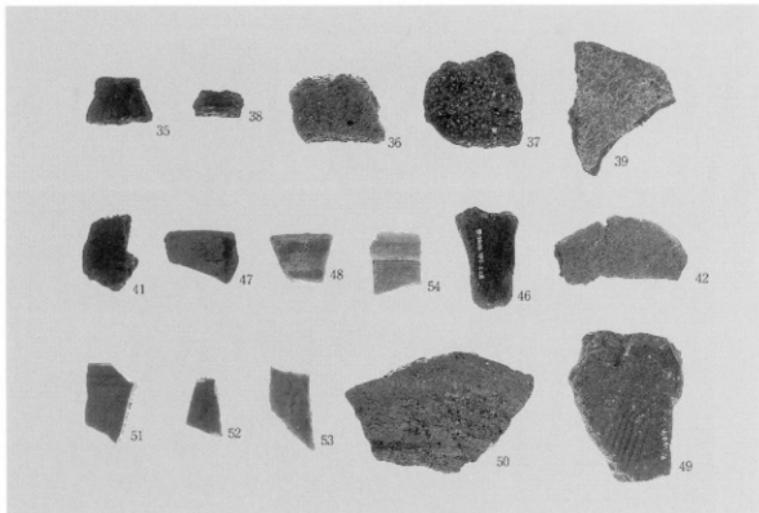


III区P 3

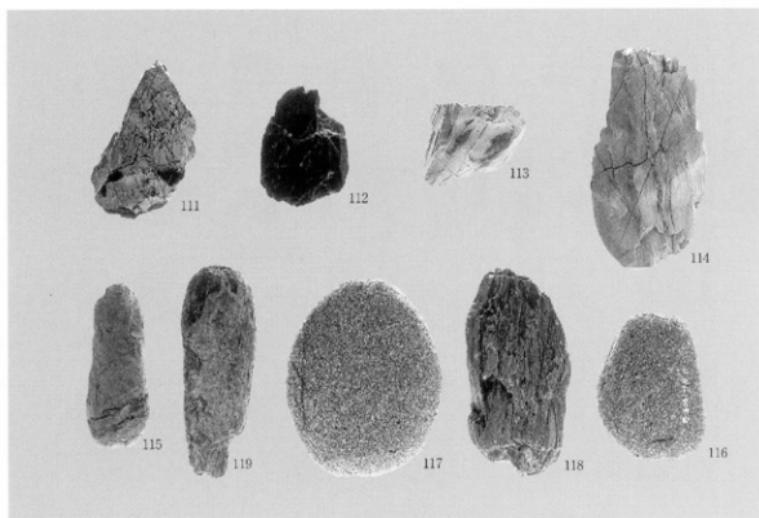


III区P 4

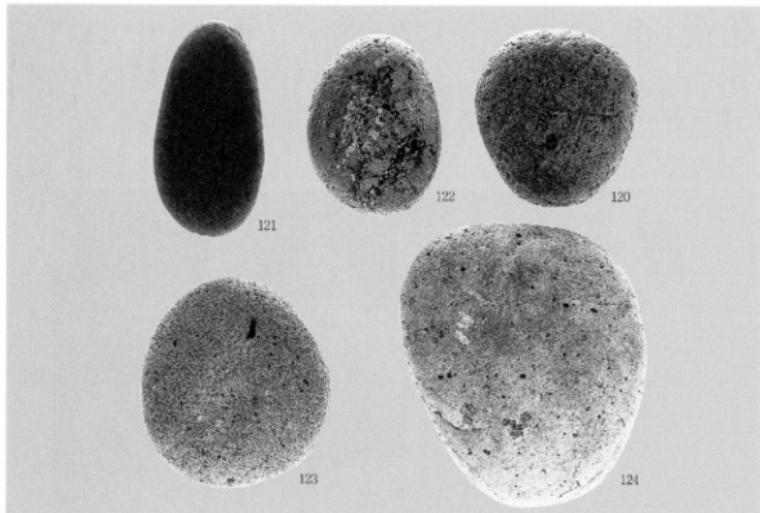
第3次調査調査状況、検出遺構



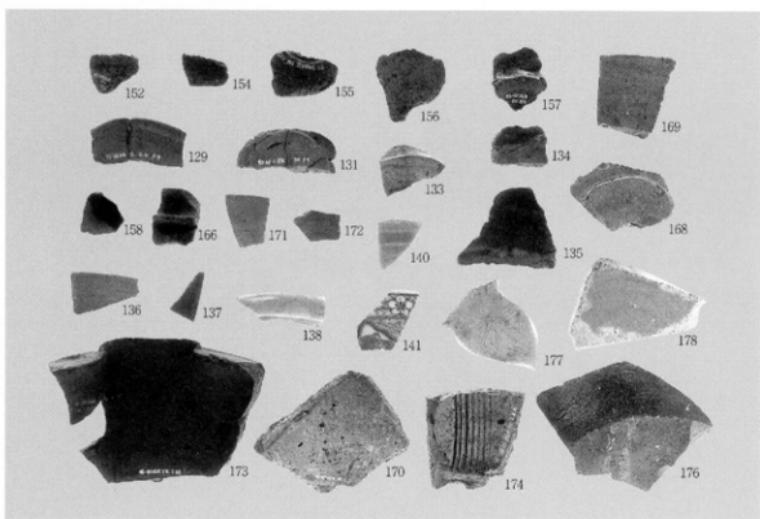
出土遺物（土器・陶磁器）



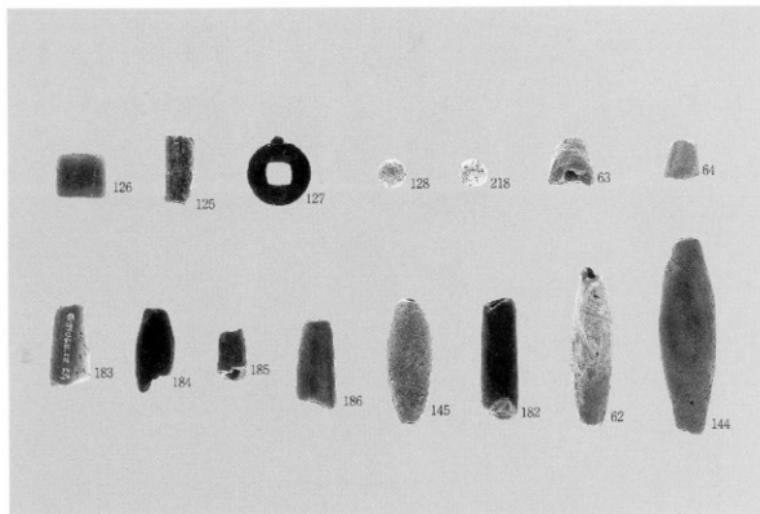
同上（石器）



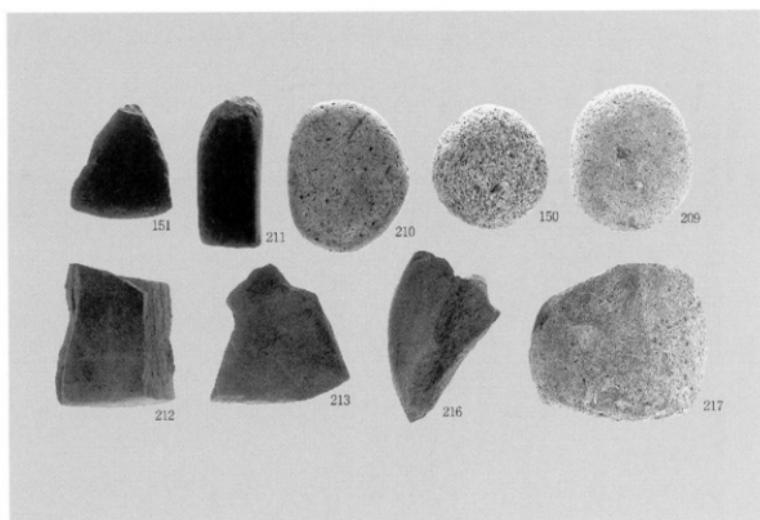
出土遺物（石器）



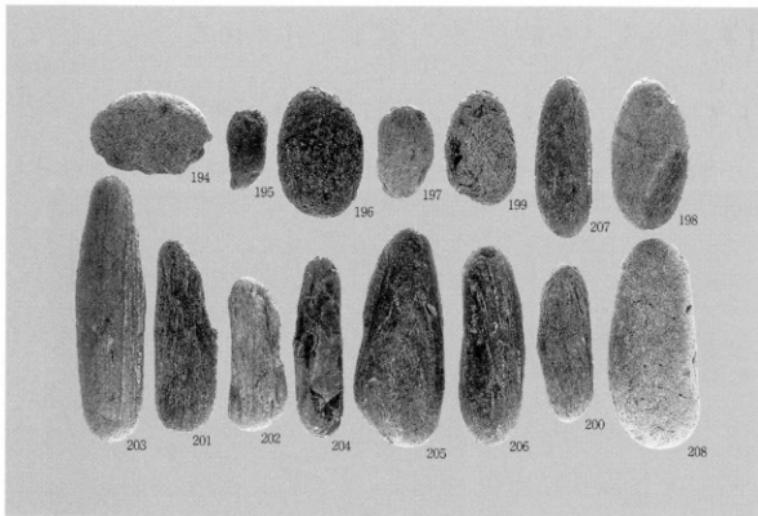
同上（土器・陶磁器）



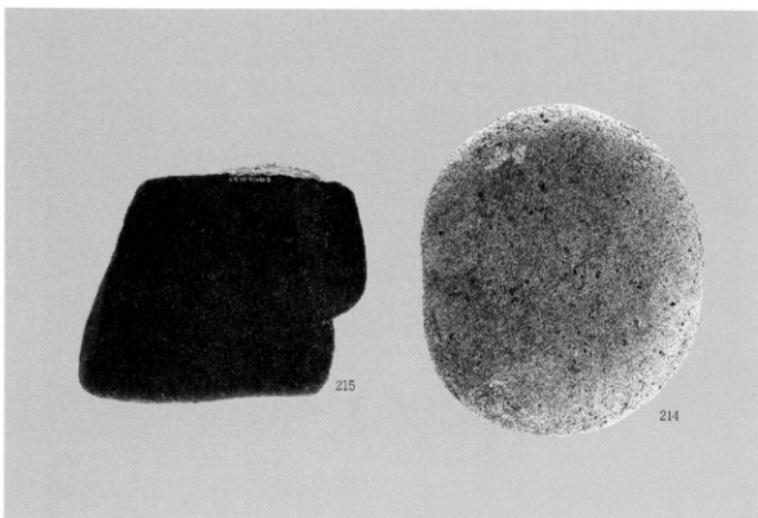
出土遺物（石製品・ガラス製品・金属製品）



同上（石器・石製品）



出土遺物（石器）



同 上

報告書抄録

ふりがな	おながわいせき							
書名	女川遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	越知町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	曾我貴行							
編集機関	越知町教育委員会							
所在地	〒781-13 高知県高岡郡越知町越知甲2562 TEL(0889-26-3400)							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
女川遺跡	高知県高岡郡 越知町女川 北屋敷ほか	39403	030022	33度 31分 53秒	133度 15分 34秒	19951205 ↓ 19951221 (第1次) 19960216 ↓ 19960229 (第2次) 19960304 ↓ 19960316 (第3次)	46	確認調査
						175	住宅建設	
						207	道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
女川遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	上坑状遺構 ピット状遺構群 石列状遺構 ピット状遺構	1 1 1	縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器？、僅前焼、青磁、白磁、陶器、磁器、土鍤、石鍤、石錐、尖頭器？、スクレーパ、2次加工ある剥片、石核、石錐、叩石、磨石、砥石、台石、石皿、引き臼、半円筒状ガラス製品、錢貨、銅玉？	半円筒状ガラス製品が出土。弥生時代前期の石器製作跡を確認。		

女川遺跡

1997年3月

発行 越知町教育委員会

高知県高岡郡越知町越知甲2562

Tel. 0889-26-3400

印刷 共和印刷株式会社

